

372-520



1200501449118

372

520

彌陀教

富士川游著



始



文學博士 富士川 游講話

彌陀教

東京 中山文化研究所

文學博士 富士川 游 講話

彌

陀

教

東京 中山文化研究所



はしかき

- 一。この小冊子「彌陀教」と題するは、余が東京中山文化研究所に於ける婦人精神文化研究会の席上にて、數回に涉りて、連続的に講演したるものを筆録したるものに係る。その要旨とするところは、釋尊が説かれたる教も、その歸するところは、この彌陀教に存することを明にせむがためである。
- 二。さきに刊行したる「釋尊の教」はこの講演の前提である。それ故に、この小冊子に記録したる事項につきては、これを「釋尊の教」に於て、講述したるところと参照せられぬばならぬ點があるかも知れぬ。しかしそれは必ずしも彼此参照することを必要とするものでなく、單にこの小冊子のみを讀まれても差支ないと思ふ。
- 三。講演は初より所見を筆録するものとは異なりて、不意に考へ附いたことも漏すことなく筆録してあるから、この點に於て、筆録とは別の興味があることと信ずる。それ故に、講演のまま、それに修正を加ふることなく印刷に附したのである。讀者諸子の諒解を乞ふ。

昭和七年一月末日

富士川 游

彌陀教目次

序論	一
釋迦教	四
漸教	六
頓教	七
釋尊の精神	一〇
釋尊の教	一三
廢惡修善	一五
諸行不及	一六
法の信仰	一八
眞實の法	一九
法を見る	二〇
小乘	二二
阿彌陀佛	二三
聖道の實際	二五
觀佛と念佛	二六
觀念の念佛	二六

稱名の念佛	二七
淨土教の實際	二八
空也上人(一)	二九
空也上人(二)	三一
惠心僧都(一)	三一
惠心僧都(二)	三四
惠心僧都(三)	三五
勸進の偈	三七
厭離穢土	三八
觀無量壽經	三九
三の罪	四〇
彌陀の本願(一)	四一
彌陀の本願(二)	四三
唯信	四五
寶物集	四七
寶の數々	四八

宗教の價值	五二
智能と感情	五五
佛道修行	五八
往生の十二門	五九
天台宗の實際	六〇
道德の心	六一
智光と頼光	六二
教信沙彌	六五
源氏物語	六七
和泉式部	七〇
枕草紙	七二
今様	七三
想佛戀	七四
謠曲	七五
念佛往生	七七
如法修行	七七
易行道	七九
往生要集	八〇
地獄極樂	八一

横川法語(上)	八一
横川法語(中)	八三
横川法語(下)	八四
口稱の念佛	八五
眞率の態度	八七
念佛の擴布	八九
專修念佛	八九
法然上人	九〇
戒定慧	九一
如法と應機	九二
專念佛名	九三
念佛爲本	九五
善導と惠心	九五
稱名念佛	九六
淨土宗	九七
ただの念佛	九七
明遍僧都	九八
重病者	九九
彌陀の他力	一〇一

生れつきの儘	一〇二
教阿彌陀佛	一〇三
かざる心	一〇五
佛のみ知る	一〇六
念佛者の用心	一〇八
對機說法	一〇九
親の名を呼ぶ	一一〇
專修念佛の辯明	一一一
三途の業	一一一
如來の金言	一一二
如說修行	一一三
應機	一一四
凡夫往生	一一五
報土往生	一一六
餘行を捨つ	一一七
本願乗托	一一八
口稱三昧	一一九
常持の言	一一九
本願を信ず	一二〇

他力の譬	一二一
法爾の道理	一二三
自然に歸る	一二四
自是他非	一二五
煩惱具足	一二五
極樂	一二六
讀誦と念佛	一二七
念佛宗	一二八
その餘弊	一二九
住蓮安樂	一三一
三心	一三二
至誠心	一三三
虚假の人	一三四
深心	一三五
廻向發願心	一三六
起行	一三七
三緣	一三八
正定業	一三九
三心の沙汰	一四〇

法蓮房	一四一
西阿彌陀佛	一四二
念佛往生の現證	一四三
對機說法	一四五
十人十色	一四六
隨類得解	一四七
信と行	一四八
勸信誠疑	一四九
定善と散善	一五〇
下品下生	一五一
白木の念佛	一五二
世間超越	一五三
教團の成立	一五三
大乘佛教	一五四
親鸞聖人	一五六
貴重の教	一五七
自分の相	一五八
内省と努力	一五九
淨土の法門	一五九

實行の方面	一六〇
信心爲本	一六一
彌陀教	一六二



彌陀教

序論

富士川 游講話

これから始めて、數十回に涉りて、連続して、彌陀教と申す題目にて、お話を致さうと思ひます。

このお話の趣旨は、宗教としての佛教の意味が十分におわかりになるやうに、順序を追て説明するのではありません。決して學問としての佛教につきてお話を致すのではありませぬから、このことは豫めよくお斷りを致して置きます。單に佛教と申しますと、學問のことがさきになりまして、これまで佛教の話と申せば、大抵、その哲學方面のことであつたり、道德上の方面であつたり、甚しきは専門の宗教學上のことであつたりして、安心立命の上から佛教を見ることは案外、

等閑なほざりに附して居られたやうでありました。たとひ、安心立命あんしんりつめいのことが説かれるやうな場合でも、矢張、その知識の方面が主に説明せられるやうであります。私にはそれ故に、さういふ學問の方面を離れて、眞に宗教としての佛教につきて、これからお話をつづけやうと思ふのであります。

佛教の専門の方では、釋尊一代の説法を大別して聖道門と淨土門とにせられて居るのでありますが、その聖道門と申すのは、この娑婆世界にありながら迷を轉じて悟を開くところの教であります。これは法華經や涅槃經を始として大乘・小乗一切の諸經に説かれてあるところの教であります。

細かに分けて申すと、聖道にも又、大乘の聖道と、小乗の聖道とがありまして、その大乘に佛乘と菩薩乘との二つがあり、小乗に聲聞乘と緣覺乘との二つがあります。

これは、これまで佛教の學問にて普通に説かれたところでありまして、その説をそのまま、ここにお話したのであります。佛乘といふのは、即身成佛の教でありまして、華嚴宗・天台宗・眞言宗・禪宗などに説かれるところの教がすなはち、大乘の中の佛乘であります。全體大乘といふのは、大きな乗物といふほ

ごの意味で、多數の人が乗られるといふことを示すもので、その佛乘といふのは、直ぐに佛になることが出来るものの乗物といふほどの意味であります。菩薩乘といふのは、却を歴て修行し、その功を積み始めて始めて佛となるの教でありまして、三論宗・法相宗などがこれに屬するものであります。

小乗といふのは大乘に反して小さき乗物の意味でありまして、その内の緣覺乘といふのは、飛花落葉を見てひとり諸法の無常をさとり、又は因縁の法則を觀じて悟を開くものであります。聲聞乘とは眞理を聞き、道理を觀じて修行の功を積み、速きは三生を經、遅きは六十劫を經て、佛になることが出来るのであります。成實宗・俱舍宗の如きがこれに屬するものであります。又聲聞乘にして戒行を貴ぶのが律宗の教であります。

かやうに聖道門の教は、これを要するに自力にて佛になるとせられるのでありますから、それに自力の教といふ名目がつけられて居ります。又自力にて修行の功を積み佛に成るといふことは至て六ヶ敷いことでもありますからそれに難行道といふ名稱もつけられて居るのであります。

淨土門といふのは釋迦教よりも遙かに後になりて始めて行はれたものであり

釋迦教

ますが、これは先づこの娑婆世界を厭ひ捨てて急ぎて淨土に生れて彼國にて佛道を行ずるといふ教であります。さうして、この場合、淨土に生れるといふことは佛の力によるもので、自分の力によるものではないからとして、この教を他力の教といひ、又淨土に生れることは自力の修行でないから容易であるといふところからこれを易行道とも名づけるのであります。

しかしながら、釋尊一代の教を別ちて、かやうに聖道・自力・難行の教と、淨土・他力・易行の教とにすることは動もすれば人々の誤解を致すの恐がありますから、私はこの區別を止めて、釋迦教と彌陀教とに別けてお話致さうと思ひます。勿論、この名稱はむかしから佛敎の學者が用ひたものでありまして、私が勝手につけた名稱ではありません。

さうして、私の考では、佛敎を宗教として見るときには、それは必ず彌陀敎の心であるべきものと信するのであります。さういふ譯で今、彌陀敎につきてお話致さうとするのであります。

釋 迦 教

釋迦教と申すのは、前にも一寸お話致した通り、この娑婆世界にありながら迷を轉じて悟を開くの道でありまして、これは釋尊が華嚴經や涅槃經の中に説かれたものでありますから、これをそのままに受取りて、釋尊の教としてこれを信奉するが故に、これを釋迦教と名づけるのであります。しかしながら、如何にして迷を轉じて悟を開くべきかといふ問題につきては、いろいろ人々の所見が相違する筈でありますから、同じく釋迦敎の中でも、そこに種々の説明が行はれて居るのであります。その大略は次の通りであります。

眞言宗では父母が生める身にて速かに佛のさとりを開くのであるとして、この身ながら大日如來の位に上るといふので、すなはち即身成佛の教であります。禪宗では前佛と後佛とが心を以て心に傳ふるといひて、人の心を指して直ちに佛といふのであります。それ故に成佛ではなく即心是佛の法と名づけるのであります。天台宗では煩惱即菩提、生死即涅槃と觀じて觀心によりて佛になると説くのであります。華嚴宗にては法界唯心の理をさとり、初めて發心するときに便ち正覺を成ずるといふのでありますからこれも即身成佛の義であります。それ故に、華嚴宗・天台宗・眞言宗・禪宗などの大乘の教に説くところのものは

漸教

この身そのままに、頓に悟りを開くのであります。これに對して同じく大乘の中でも三論宗や法相宗などでは多くの年月を経て修行の功によりて佛になると説くのでありまして、三論宗では八不中道、無相の觀に住すると申して一切の考を否定し、それに心に佛にならうとする願を起し、身には六度（布施、忍辱、禪定、智慧、持戒、精進）を行じ、長い間菩薩の道を修めて後に佛に成るといふのであります。法相宗にありては唯識の觀に住して、しかも願を起し、六度を行じて長い後に至りて佛になるといふのであります。成實宗や俱舍宗に至りては智慧を研き戒律を持し、これによりて遂に佛になると説くのであります。

漸教

此の如く、釋迦教にありて釋尊の教をそのままに奉ずるといふにしても、それを奉ずるものの心がいろいろに相違して居るから、大乘と小乗との差異があらはれ、又それに四種の乗が區別せられるのであります。しかしながら、その終局の目的であるところの佛となるといふことにつきましては、それが速かに出来るのと、遅く出来るとの差異によりて、これを頓教と漸教とに區別するのであります。

頓教

す。

漸教と申すのは段々と修行してその修行の功を積みて佛になるのでありますから、漸次に進む道であるといふ意味で、これを漸教といふのであります。漸次といひましても三祇劫とか、六十劫とかと申して、何百萬年かわからないやうな永い年代であります。これは我邦に古く傳はつたところの佛教で、法相宗・俱舍宗、さうして律宗、この三つの教であります。今日ではかやうな漸教は殆ど行はれて居ないと申して差支ありません。

頓教

これに反して、釋迦教の中で、華嚴宗や、天台宗や、眞言宗や、禪宗や、日蓮宗のやうに、此身のままに眞理を悟つて佛になるの教を頓教と申すのであります。釋尊は因縁が和合して一切のものが生ずるといふことを第一に説かれました。それ故に「我」といふものがあらはれたのも全くそれがあらはれるだけの因縁がなくてはなりません。それ故に今の「我」は全く前の「我」の結果としてあらはれたのであると考へねばなりません。我々にして若し現在の「我」の

愚悪なるに氣がつきてそれから離れやうとするならば、將來の「我」を善くするために現在の「我」を善くすることをつとめねばなりません。ここに於て、釋尊は廢惡修善の法を説かれたのであります。「諸惡莫作、衆善奉行、自淨其心、是諸佛之教」とは釋尊が常に説かれたる教として「法句經」に載せられて居るのであります。因縁を觀するといふことはそれ故に釋迦教の主要なる點であります。釋尊は又、諸行は無常である、と説かれました。世の中の一切のことが無常でありますから我々人間が生れることも無常でありまして、生れてから后、寸刻も常として止まることはなく始終變化して居るのであります。ところが我々はこの無常の中に於て常の想をなし、堅く執りて動くことのないやうにと望むのであります、これを執常の倒見と申すのでありますが、この倒見があるために我々にはいろいろの苦惱が起つて來るのであります。已に一切が無常であれば諸法は無我であらねばなりません。世の中の一切のものが無常である以上は、一切のものに常一主宰の我があるべき筈はないのであります。一切のものが始終變化するのにその内に常住不變の我があるといふ譯はありません。それ故に釋尊は無我のことを説いて、世の中の人々をして早くこれを悟らしめやうとせ

られたのであります。

釋尊は又四諦の眞理を説かれました。それは第一に苦諦でありまして、人生に目がさめて、自己の精神生活を見つめたるときには一切が苦惱である、と知るべきであります。まことに苦惱は人生の眞實の相でありますが、それは渴愛と執著の心によるものであると釋尊は説かれました。これを第二の集諦といふのであります。渴愛とは願ひ求むる欲望で、執著とは已に得たるものを失ふことのないやうにとの心であります、それが我々に苦惱を與ふるものであります。已に人生の相が苦惱であるといふことを知り、又その原因が渴愛と執著にあることがわかれば、その渴愛と執著を滅することが必要であります。通俗の言葉にて言へば渴愛・執著等の欲望を滅ぼすことを肝要とするものでこれを第三の滅諦といふのであります。さうして、さういふ境地は涅槃でありますから、滅諦といふのは涅槃の境地に至りて心の平和なる世界に住むといふ意味であります。しからは、如何にして、苦惱の原因たる渴愛と執著を滅するかといふに、釋尊は八正道を修むることによりてその目的が達せられると説かれました。

釋尊の精神

八正道といふのは正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定(約めて言へば六度)であります。これを道諦といふのであります。釋尊はこの四つの聖諦を説きてこれを人々に示されたのであります。

頓教と申すのはこの釋尊の教をよく理解して、それを體驗することによりて、この身のままに、迷を轉じ、悟を開くべき教であります。

釋尊の精神

釋尊の教が、その言葉にあらはれたるものはまことに此の如くであります。しかしながら、その教を奉じてそれを自分のものとしやうとするならば、その言葉の中に含まれて居るところの釋尊の精神を十分に明かにせねばなりません。むかしの書物の中に、ある愚なる女中が、その主人から、『この魚をよく見て居つて呉れ』といひつけられて、一生懸命にそれを見て居つて、猫が来てそれを取つたのまでこれを見て居つたといふ話がありました。いかにもその言葉は『善くそれを見て居れ』といふのでありますが、その言葉の中に含まれて居る意味は『猫の取るのを番をして呉れ』といふことでありますから、見て居つた

だけではその言葉の意味を體得したとは言はれませぬ。

これと同じやうに、釋尊の言葉にしても、その中に含まれたる意味を十分に理解して、それを味得するのではありません。釋尊の教を奉じたものとは言はれないでありませう。

そこで、釋尊がその教を説かれた精神は何處に存して居つたかといふことを考へて見ることに、その教を奉ずる上に、第一必要であります。それにつきては種々の方面から考へなければなりません。今、ここに、私が考へつきましたことにつきて大略のことを申し上げて見ませう。

釋尊はその頃までの印度の學者が、種々の思索を盛にして、それによりて苦惱を去らうとしたのを排斥して、それは駄目であるとせられたのであります。思索といふのは智慧のはたらきに屬するものであります。それによりては苦惱を除くことは出来ぬとせられたのであります。つまるところ、哲學的の思索によりては、我々は苦惱から離れることが出来ないとせられたのであります。言ふまでもなく、宗教は哲學ではありません。哲學が宗教の代りをするには出来ませぬ。

それから釋尊は我々がいろ／＼の見解を立ててもそれによりて我々の苦惱が除かれることはないことを示されたのであります。我々の生命といふものはどういふものであるか、我々が死して後にどうなるものであるかといふやうなことが、理屈の上で、善くわかつたとしても、それによりて苦惱が除かれる譯はないのであります。有名なる一茶の俳句にもある通ほりに『露の世は露の世ながらさりながら』であります。我々の世界が露のやうな脆いものであり、そこに住むで居るところの我々の命が露のやうに脆いものであるといふことは十分に承知して居りましても、可愛い我が子の死むだのはまことに哀しみに堪へぬことでもあります。誰人でも、人間がすべて死ぬるものであるといふことは知りぬいて居るのでありませう。しかしながら、死ぬるといふことは誰人にも苦惱の種であります。死むだ後のことが明瞭にわかつたとしてもそれによりて早く死にたいと思ふ心が起る筈は決してないことでありませう。それ故に、我々が如何なる見解を立てたにしても、その見解によりて苦惱を除くことは出来ぬのであります。

釋尊は又、その頃まで、自分の心の外面だけを見て、種々の教を立てたのに反して、自身の心の内面を見て、その教を説かれたのであります。苦惱といふもの

は人々が考へて居るやうに心の外に存するものでなくして、我々の自分の心にて造り上げるものであるから、その自分の心を調べるのが第一であると釋尊は示されたのであります。釋尊が四諦を説かれたのも歸するところは、自分の心を内観するといふことに外ならぬものであります。

大體、かやうの次第で、釋尊の教は、事實に就てその説を立てられたものであるといふことが明瞭であります。決していろ／＼の理屈を考へ出して、かうあるべしと説かれたものではありません。或る門人が釋尊に對して、死してからはにもなほ命がありますかといふやうなことを質問したときに、釋尊はそのやうなことは無用の問題である。苦惱を離れやうとして、さういふ見解を明かにしたところで、苦惱は決して已むものではない。自分はさういふ無用のことは説かぬ。自分が説くところは現在、我々が苦惱の状態から離れる道であると言つて、さういふ問題に對しては何等解決を與へられなかつたのであります。

釋尊の教

釋尊の教

さういふ次第でありまして、釋尊の教には儀禮といふものはなかつたのであ

ります。すべての人が學ぶことを要するところの教義といふものもなかつたのであります。それから、その頃の印度の人が考へて居つたやうな神といふものもなかつたのであります。その當時の印度の大多數の人々はいろ／＼の神を考へて居りまして、たとへば山の神、樹の神、その他、自在天とか、何とかといふやうな種々雑多の神を信じて、それに祈り、又それを祀つたのであります。しかるに、釋尊の教にはさういふ神はなかつたのであります。

釋尊の説法は、それを聞く人に對して、その智慧に相當して、十分によく理解が出来るやうに、或は譬喩、或は寓話、或は事實上の話をしてその人をして自然に不可思議の法に觸れしめるやうにとつとめられたのであります。

かういふ次第でありますから、釋尊の教は全く釋尊自身の内證と申して、釋尊自身が悟られたところの眞理をそのままに人々に傳へられたものであると言はねばなりません。釋尊の教は全く事實を開陳せられたものであつて、決して一定の教義を立てて、これを人々に教へられたものではありません。今日では、佛教の各派におの／＼その派に特別の教義といふものが行はれて、代々これを受けて傳へて居られるやうであります。さういふ信條は釋尊の教には一とつとも無

かつたのであります。ただ釋尊が自覺によりて悟られたる眞理が主として説明せられたのであります。しかもそれは何時でも事實に據りて示されたといふことが釋尊の教の特徴でありました。

廢惡修善

前にも一寸申した通ほりに、釋尊の教はまことに簡單明瞭のものであります。世の中の一切のものの眞相をば明かに觀察し、それによりて誤まりたる所見を正し、従つて種々の苦惱をそれによりて除くべしと説かれたのであります。これを實際的に言へば、八つの正道を修めて行くといふことに歸著するものであります。さうして釋尊が八つの正道と申されたのは正見と正思惟と正語と正業と正命と正精進と正念と正定とでありましたから、これを約めて言へば布施、持戒、忍辱、精進、智慧、禪定の六度か、戒、定、慧の三學になるのであります。結局、惡を廢し、善を修むるといふことが、釋尊の教の要旨であると考へられるのであります。

それ故に、釋尊の教は道德を主とするもののやうに思はれます。殊に小乗の

諸行不及

聲聞とか縁覺とかと申すものでは戒律のことが嚴重に言はれるので、釋尊の教は精進一徹のものであるやうに解せられるのであります。しかしながら、釋尊が廢惡修善のことを説かれたのは、それによりて眞理を悟ることが出来ることせられたからでありませう。八正道を修めることによりて、自身の相を明かにし、我々の心が如何に眞實を離れて居るかといふことを明かにすることが出来ることせられたからでありませう。これは前にも申したやうに『諸惡莫作、衆善奉行、自淨其心、是諸佛敎』と釋尊が申されたことによりても、推知することが出来るのであります。

諸行不及

惡を廢して善を修めよと言はれるからと申して、ただ單に惡を廢し、善を修めやうと努力することが、釋尊の精神を知つて、正しくそれを奉ずるものであるとは申されませぬ。惡いことを止めなければならぬとすれば惡いことはますます多く氣につくものであります。惡いことの數は甚だ多いのでありますから、それを一とつ二たつと止めて行つても、何時それが全く已むかはわかりませぬ。

ぬ。恐くは我々の一生の間にはその千分の一も萬分の一も已むことはないであります。親鸞聖人が『何れの行も及びがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし』と申されたのはまことに徹底したる内省によりてあらはれたる言葉であります。ただ釋尊が説かれたる言葉だけをそのままに受取りて惡を廢し善を修めるやうに努力することは、一寸考へれば、釋尊の教に従つたもののやうに思はれるのであります。その實は釋尊の教の形式のみを傳へてその精神を無視したものであります。宗教といふものが自身の心の問題である以上は、我々はどこまでも自身の心の内面を觀ねばならぬのでありますから、釋尊も『心を法の本とす』とか、『自己を調へよ』とかと言つて、内省を十分にすべきことを説いて居られるのであります。常識で考へても、釋尊が説かれた言葉を聞きまして、それが自分のものとならなければ、何の役にも立たぬことでもあります。そこで釋尊が八正道を修めて涅槃の悟を開くことが出来ることと教へられたことを、我々が自身の心の有様の上に受取りて見れば『何れの行も及び難き』といふ事實が知られるのであります。まさに釋尊の教とは反對のやうであります。しかしながら、それが釋尊の教によりて、見ることの出來た自身の相であります。

法の信仰

かういふ譯でありますから、釋尊が『苦惱は我々が渴愛と執著とによりて自ら造るところのものであるから、八正道を修むることによりて、渴愛と執著とを滅し、それによりて苦惱を除く』べきであると説かれましたことにつきても、その釋尊の精神の内に「法」といふものに對して極めて熱烈なる信仰が存して居つたといふことを知らねばなりません。釋尊が阿難に向つて説かれました言葉に『法を燈とし、法を家となし、自からこれに歸依して、他に歸依することなかれ』とあります。又釋尊は迦葉といふものに對して念法といふことの説明をして居られますが、それに據りますと、『如來の法といふものは妙なるものの中の最も妙なるものである、此法は心の見るところであつて、肉の眼の見るところではない、生じたものでもなければ出たものでもない、住らず、滅びず、始なく、終なく、無爲無數であつて、譬に説くことも出來ず、我々にもどうすることも出來ないものである。しかしながらこの法は家のないものに家となり、頼りのないものに頼りとなり、心の暗きものに光となり、悟りの岸に至らざるものを覺り

眞實の法

の岸に至らしめるものであり、香のないものに香を與へるものである』といふやうに説かれました。これ等の説明によりて見ましても、釋尊には「法」の信仰といふものが強かつたといふことが考へられるのであります。「法」といふものを燈とし、それによりて導かれて行かねばならぬといふことが強く信せられて居つたのであります。正道を修めるといふことも要するに「法」に導かれるのであります。結局、「法」によりて涅槃の悟りが開かれるのであります。釋尊はかやうに「法」の妙徳を信じて悟の道に入られたのであります。かやうな信仰がなくては、ただ釋尊の言葉の表面のみを受取る場合には、釋尊の精神に背くことが甚しいこと申さねばなりません。

釋尊が燈とし、依り所とせよと言はれるところの「法」は不可思議のものであります。我々の言説を離れたものであります。不生不滅・不増不減・無爲無數にして、心も及ばず、言葉もたへたものであります。それ故に「法」を燈と

法を見る

すると言ひましても、さういふ不可思議のものをば我々がつかむといふことは出来ぬものであります。言葉通りに解釋すれば「法」を燈とするといふのでありますから、先づ「法」といふものを見出して、しつかりとそれを握つて、それを燈とすべきであります。しかしながら「法」といふものは我々の目に見ることの出来るものではありません。又言葉でこれを説明することも出来ぬものであります。佛教で「眞如」と申して居るものがすなはち「法」でありますから、これを「眞實」といふ言葉に代へても差支ありません。しかしながら、「眞實」と申しても我々が平生、使つて居るところの眞實とは違つたものであります。我々が平生使つて居るところの眞實は虚偽に對していふところのものであります。ただ相對的のものであります。ここに「眞實」といふものは、さういふ我々の考を離れた絶對的のものであります。我々の平生の言葉で眞實とか、虚偽とかといふやうな我々の考を離れて、居るものでありますから、我々は直接にこれに觸れることは出来ぬものであります。

法を見る

「法」といふものは、かやうに不可思議のものであります。我々は直接にこれを見ることは出来ぬものであります。しかしながら、「人」や「物」を通じて間接にその「法」に觸れることが出来るのであります。釋尊につきて申せば、我々は今日でも、釋尊の言行を通じて、その中に動いて居るところの「法」を見ることが出来るのであります。釋尊在世の當時には釋尊に接したる多くの人が釋尊の身體を通じて「法」といふものを見ることが出来たであります。跋伽梨カリーといふものが釋尊に始めてお目にかかつたときに『私は身體に力がなくしてあなたにお目にあたるといふことが、これまで出来なかつた』といふ意味のことを言つたところが、釋尊はそれに對して『法を見るものは私を見る』と言はれました。いかにもさうでありませう。釋尊は言ふまでもなく一人の人間であります。その人間の身體が無くなつてから三千年の後の今日にも、なほ釋尊が存して居るのは全く釋尊の身體を通してあらはれたところの「法」であります。それ故に、釋尊在世の當時に、世尊として釋尊を尊崇したのは全くその「法」に接することが出来たためであります。『法を見るものは私を見る』のであると釋尊が申されたことはいかにも當然のことでありませう。

小乘

小 乘

そこでお話を致さなければならぬのは佛教でいふところの小乗のことです。小乗といふことは、小さい乗物といふ意味で、多くの人が乗ることの出来ぬ乗物で、多くの人が進むことの出来ぬ道であります。佛教の内、我邦に最も古く傳はつた成實宗とか俱舍宗とかいふやうなものがこの小乗に屬するものであります。無論自分で小乗と言つたのではなく、後に起つた大乘に對してこれを小乗といふのであります。さうして、大乘は釋尊の精神を開展して興つたものでありますから、それは釋尊の教説ではないとまで言はれ、大乘非佛説と申す議論もありますが、小乗の方はこの點から申すと、釋尊に親炙した人々の説いたところに據るとせられたもので、いはば原始的佛教であります。しかしながら、それが果して釋尊の精神を傳へたものであるかといふことは別問題であります。

小乗の中には聲聞乘と緣覺乘との二種が別けられて居ります。緣覺といふのは飛花落葉を見て、獨り諸法の無常をさとる、或は十二因縁を觀するといふやう

阿彌陀佛

に、修行によりて悟を開くことをつとむるものであります。聲聞乘といふのは四諦の眞理などを聞きそれによりて修行して涅槃のさとりをひらくことをつとめるものであります。この二つものは共に釋尊に接近した人々の教に本づくものであるとせられるのでありますが、いかにも釋尊は嚴肅の生活を説き、自身にも極めて嚴肅の生活をせられたのでありますから、直接にそれに接觸した人々は、それに習ふて涅槃のさとりをひらくことに努めたものでありませう。その中には固より釋尊の精神を理解して居つたものもあつたのでありませうが、多くの人々は、釋尊の精神といふものには注意せず、ただその嚴肅の生活のみを模倣して、それによりて涅槃のさとりをひらくことが出来るかと誤解したのでありませう。恐らくは釋尊在世の當時には面前に崇高なる人格を見て、それを欽仰するのあまりに、ただその形式の外にあらはれたものが目にどまり、その内部に動いて居つたところの眞實の法は、多くの人々の目に著かなかつたのでありませう。

阿彌陀佛

しかしながら、深く考へて見ますと、釋尊が眞理を悟り正道を修めることによりて悟を開くことが出来ると言はれた、その心の中には強き「法」の信仰が存して居つたのであります。

さうしてその「法」といはるるは「佛性」といひ、「如來」といふもので、それを限定すれば、阿彌陀佛であります。それは佛教で説かれるところの佛には澤山あります中に、一切の衆生をたすけむといふ願を起して修行して佛となられたのは阿彌陀佛であると示されて居るのでありますから、宗教の意味を強く考へていふときは、釋尊の身體を通して我々の前にあらはれたのは全く阿彌陀佛あると言ふべきであります。それ故に、一方から見れば、釋尊はこの阿彌陀佛の法を説くためにこの世にいられたのであると申すことも出来るのであります。

我々はかやうにして、釋尊によりて示されたる阿彌陀佛を崇拜し、その教に従ふて、轉迷開悟の目的を達することが出来るのであります。すなはち釋迦教に對して、これを彌陀教と名づけるのであります。私はこれから、この彌陀教の要旨につきて段々とお話を進めようと思ふのであります。

聖道の實際

前にお話致したやうに、佛教には、聖道と、さうして淨土と名を附けられて居る二つの大きな分派があります。しかしそれは釋尊の教を受取る人の側の方で造つたのでありまして、元來の釋尊の教がさう二つに別れて居るわけではないのであります。ところが佛教が我國に這入りまして奈良朝時代から、平安朝時代に掛けて、いろいろの宗派が行はれました中に、最も盛であつたのは天台宗であります。京都の比叡山に延暦寺が建てられました、其所を道場として、傳教大師の宗教が擴がつたのであります。學問の上から言つても、天台の哲學は佛教の中で最も發達したものであると言つて差支ありません。無論、天台宗の教理と申すやうなことは六ヶ敷い理窟もありますけれども、實際から眺めて見ると、第一に法華經を讀誦すること、それから眞言を行すること、それから禪觀を修すること、それから菩薩戒を持つこと、それから念佛すること、これが天台宗にて實際に行はれたものであります。

觀佛と念佛

觀佛と念佛

かやうに、天台宗の實際につきて、法華經讀誦、眞言行、禪觀修、菩薩戒、念佛が行はれたのは、要するに、それによりて佛を觀るのでありまして、疫病が流行つたときにもお經を讀むことが行はれたのも畢竟は佛をたのむのであります。それから眞言を行することも、それから禪觀を修することも、自分の心を内觀してそれによりて佛を觀るのであります。それから戒律を持することも、念佛を申すことも、皆、佛を觀るの法でありまして、念佛も讀誦と同じ意味のものであります。ところが、それ等の方法によりては安心立命の境に達することが出来なかつたために、別の意味を持った念佛が始まつたのであります。それは前に申した念佛が觀念の念佛であるのに反して、ただ佛名を稱ふる念佛でありました。

觀念の念佛

觀念の念佛

念佛と申すことは、元來、佛を念ずるのでありまして、すなはち佛の相を念じ、

稱名の念佛

稱名の念佛

佛の心を念じ、その根本に入つて申せば眞如を觀するのであります。たとへて申せば、佛の國は極樂であります、その極樂の立派なことを念じ、この世界がまことに穢ない苦しい世界であるといふことを考へて、そこでこの汚ない苦しい國から綺麗な淨土に行かうといふことを念願するといふやうなわけで、それには自分の智慧を研いて、眞理を覺つて、さうして覺を開くといふことが目的であります。それが前に申した聖道の教であります。これを釋迦教と申すのであります。實際から申せば觀佛の教であります。我邦に始め行はれた佛教は、すなはちかやうな釋迦教でありました。それで觀佛といふことが盛んに行はれて居つたのでありまして、念佛と申しても觀念の念佛に外ならぬものでありました。

この釋迦教の要旨を一口につづめて申せば、自分の心をよく調へて、それによつて涅槃の證を開くべしといふことであります。迷を轉じて悟を開くべしといふ教であります。それは全く釋尊の説かれたところでありまして、そこで釋

淨土教の實際

迦^〇教と名づけられたのでありますが、しかしながら、さういふ教を自分のものとして受け取つて、その教に動かされて進んで行くといふことにならなければ、宗教としては何等價值のないことであります。それ故に、さういふ教を自分の心に受け取つて、さうしてそれを自分のものとして自分の心の上に釋尊が説かれた教の意味をあらはすといふことになる、法華經を讀誦するといふことも、眞言を行するといふことも、禪觀を修するといふことも、菩薩戒を保つといふことも、念佛するといふことも、畢竟ただこれを行ふといふだけでそれが自分のものとはならないのであります。そこに氣の附いた人が、別の意味の念佛を申すやうになつたのであります。佛の功徳を念じてさうして佛に縋つて行かうといふやうな念佛にぶつつかつて、さういふことはとても出来ない自分であるといふことに氣の附いた人が、觀念の念佛を捨てて稱名の念佛に移つたのであります。

淨土教の實際

觀念の念佛と稱名の念佛と、念佛といふ言葉は同じでありますけれども、その

空也上人(一)

意味は全く相異したものであります。早く申せば觀佛といふことは佛の功徳を考へ、佛の慈悲を考へ、さうしてその佛に縋るのであります。これに反して稱名の念佛といふことは唯だ佛の名を唱へるのであります。佛の名を稱へるといふことは、觀念の念佛でも、同じことでありまして、矢張り佛の名を稱へるのであります。その稱へる心持が相異して居るのであります。觀念の念佛は自分の心によつて行を起すのでありまして、稱名の念佛は行に歸して心を捨てるのであります。そこに非常な相異があるのであります。さうしてかやうに相異の起るのは全く自分の心をよく省みると省みないことによるのであります。

空也上人(一)

天台宗の高僧でこの稱名念佛をした第一人者は空也上人であります。この空也上人は延喜年間の人であります。自分の出た所は言はれないし、父母の名も言はれないし、ごうした人かその履歴のはつきり判らぬ人であります。或は天子のお子様であつたといふことも傳へられて居りますけれども、それは虚傳でありませう。唯だ京都の町を常に佛の名を稱へて歩いて居つた人でありました。

から阿彌陀聖と稱せられて居りました。言ふまでもなく天台宗の高徳でありまして、天台宗の觀念の念佛から、ただの稱名念佛に入つた人であります。元々天台宗の人でありますから、前に申しました天台の五つの方法を修行して居つた人ではありますが、自分を省ることが非常に深かつたために、その念佛も稱名の念佛になつたのでありませう。今日でも、宗教の心理をしらべて見ますと、觀念の念佛は何時でも内省によりて稱名の念佛になるのであります。空也上人は天性、宗教的人でありまして、その行といふものは實に世間ばなれのした人でありました。或るとき山の中に這入つて弟子を連れて生活して居られたのであります。いろいろ米を集めたり、それを炊いて御飯にしたりすることが大變うるさくなつて、或るとき突然空也上人の姿が消えた、弟子が驚いて方々探したところが、京都の町で乞食の仲間に這入つて菰を被つて寝て居られたのであります。世間が騒がしいから山の中に這入つて居つたが、山の中も亦騒がしいからそこでかうして居るのだと平然として乞食の群に這入つて、隱遁して居られたといふことであります。

空也上人 (二)

空也上人(二)

空也上人が鞍馬山の溪の中をあるいて居られましたときに、向ふから侍が鹿の角と猿の皮を持つてやつて來るのに逢はれました。空也上人はその侍に向いて、あなたは妙なものを持つて居られるがそれは何ですかと尋ねられました。ところがその侍は私は狩をして鹿と猿をとつた、鹿は角を切り、猿は皮を剥いで持つて歸つたのでありますと答へました。さうすると空也上人は涙を流して、それは自分と一緒に此山の中に暮して居つたものであります。それを殺すといふことは何事でありますか、どうかその角と皮を私に下さいと言つて、それを貰つてその角を杖とし、猿の皮は自分の著物にして始終自分の身につけて離されなかつたといふことであります。その侍は平の定盛といふ男でありましたが、空也上人の言はれたことと態度と、それから後の行とに、ひどく感激しまして、誠に悪いことをして濟まなかつた、生きものは自分と同じやうに命を持つて居る、自分も命が惜しいのに、殺される鹿も猿も命が惜しかつたであらう、誠にすまぬことをしたと悔悟して、空也上人にお願いして頭を剃りて修行しよう

と思ふ心が起きまして、空也上人に向つて、『私には妻子がありますから、妻子を捨て、これからはあなたのお伴をして修行しようと思ひます』と申したところ、空也上人は『妻子を捨てるのは慈悲の殺生だから、それはよくない、妻子を持つたまま、髪のあるまま教に従つて修行されれば善い』と言はれました。平定盛はすぐに空也上人の弟子になつて宗教的生活をしたといふことではありません。當時天台宗には空也上人の他にもいろいろ高徳があつたのでありましたが、れども、多くの人々はその教のまますすつと進んで行かれたのでありますから、修行の功はありましたけれども、空也上人のやうに宗教の心にみち／＼して生活して居つた人は少なかつたのでありませう。天台宗で説くところの教といふものは、固より同じでありますけれども、受け取る人の心持がどうそれを受け取るかといふことが問題でありまして、そこで空也上人は實に宗教的に徹底した人であつたといはなければならぬのであります。

惠心僧都(一)

惠心僧都(一)

空也上人にすこし遅れて、惠心僧都といふ人が出て來られたのでありますが、

この人が今申した稱名念佛の道に入つた有名の人であります。天台宗から出て稱名念佛を初めて盛んにやつたのが空也上人であつたとすれば、惠心僧都は第二番目にそれをやつた人であります。惠心僧都は、前にも後にも一寸類のないほどの學者でありました。この惠心僧都が空也上人の高名を聞かれて、その上人に會ひたいものだと思つて居られたところが、或時京都の町でふと空也上人に會はれました。まことに徳の高い、前にも申したとほりに人間離れのした阿彌陀聖あみだせいと言はれるほどに南無阿彌陀佛を申して居られる人でありましたから、惠心僧都もひどく感ぜられました。空也上人に向いて、『私は極樂を願ふ心が誠に深いのでありますが、往生は出來ませうか』とかう聞かれたのであります。さうすると空也上人が言はれるのに、『私は無智のものでありますからさやうなことは少しもわかりませぬ、唯だ昔の偉い人の言はれたことを聞いて、さうして考へて見るのに、往生の出來ないといふことはいふと思ひます。いろ／＼觀念の力をはたらかしてさうしてだん／＼と進んで行つたならば、非想、非非想までは至ることが出来るのであります。淨土を願ふものも矢張り同じことではありません。穢土を厭ひ淨土を願ふ心持が深く、それによつて進んで行つたら往生の出來

惠心僧都(二)

ないことはないと思ひます』と空也上人は言はれました。惠心僧都はそれを聞かれて、まことにさうだと感心して涙を流して空也上人を拜まれたといふことであります。後に惠心僧都は往生要集といふ書物を書かれまして、稱名念佛の意味を詳しく書かれましたが、その往生要集の本となつたものは、空也上人が穢土を厭ひ、淨土を願ふといふことを説かれたことであります。

惠心僧都(二)

さて、惠心僧都がどういふやうにして觀念の念佛から稱名の念佛になられたのでありますかといふことは、今考へて見たいと思ふのであります。惠心僧都は非常に才智の優れた人であつたと傳へられて居ります。その少年の時のことにつきていろいろの話が残つて居るのであります。さういふ才智に富むた惠心僧都を生むで、さうしてそれを育てたお母様が又非常に偉い人でありました。お父様は早く死なれたのでありますから、惠心僧都はお母様の手で育つたのであります。お父様の言置で、少し年を取つたら叡山に上して僧侶にするやうにといふことで、六つか七つの年に、大和の國から京都の叡山に上して佛道を修行せ

惠心僧都(三)

しめられたのであります。元來がゑらい人であるのに修行が善かつたので間もなく出世せられまして、年が二十幾つで已に有名の大家になられたのであります。朝廷でお經の講釋をするやうな偉い人になつて、いろいろ頂戴物をせられたので、惠心僧都はその喜びを母上に傳へるやうに朝廷から頂いたものを使ひ持たせてそれをお母様の所に送られました。ところがお母様はそれを受け取られぬのみならず、自分が自分の可愛い子供をば自分のもことから離して叡山に上して佛道を修行せしめるのは、一身の名譽のため、一家の利益のためではない、衆生濟度のために外ならぬものである。年がまだ若いのに、人から褒められたとて有頂天となる心持は何事であるか、自分はさういふことを期待したのではない、といふやうな意味のことを言はれたと傳へられて居ります。惠心僧都はそれを聞いて、大に内觀せられまして、それから一生懸命に佛道を修行せられたといふことであります。

惠心僧都(三)

偉い人は蔓を引くものであります。惠心僧都の妹に安養の尼といはれた人が

ありますが、この安養尼が又非常に宗教的人でありました。或る時安養の尼の家に泥棒が這入りまして、著物を盗みて歸りましたが、その歸つたあと、庭に著物が落ちて居りました。尼はそれを見てそれは今の泥棒が落したのだから持つて行つてやれと使の人をやられました。ところがその泥棒はそれにひどく感激しまして、悪い所に這入つたと言つてさうして尼の家で盗み取つたものを皆な返却してしまひましたといふ話が残つて居ります。安養の尼はかやうに宗教心が強かつたのであります。或時、恵心僧都が話されたことに『どうもこの浮世といふものはまことにものろいもので、たとへば春が過ぎて夏になり、夏が過ぎて秋になり、秋が過ぎて冬になり、今木が生々して居るけれども、しばらくするとこの木の葉が落ちる、これを以ても人の命が露より脆いことを感せねばならぬといふことを申されました。安養尼はそれを聞いて『あなたは世の中のはかないことをそんなに悠暢に考へて居られるのか、出る息は入る息を待たない、世の中に春が過ぎて夏が来るなどそんなに悠暢に考へて居られますか』と言はれました。それで恵心僧都は閉口せられたといふやうな話も残つて居るのであります。兎に角お母様が偉いし、妹も偉いし、御自身も偉いのであります。

勸進の偈

恵心僧都が後にお母様に勸進の偈といふものを書いて送られました。長いものの中に次のやうなことが書いてあります。

三界はみな苦惱なり、鳥の樊籠を被るが如し、苦に於て樂を思ふがゆへに、久しく生死に流轉す、人命は極めて無常なり、幼少の人なほ死す、何かいはんや衰老の者をや、いかにぞ發心せざらん、念々の中の惡業は、冥官みな注記す。銘々が皆な一念く心起る、其度毎に造る所の惡い業は地獄の役人が一つ一つそれを記載するといはれるのであります。

きくならく多惡のもの、地獄の中に馳遣せらる、過去無始のつみ、ただ命終の時をまつ、現在無際のごがは、更らに受生の處をあらそふ、

かやうに、人生の有様を説いて、さうして更に次のやうに言つて居られるのであります。

男女愛子といへども、誰の人か相すくふ者あらん、自ら恣に惡業を造りて、火の中に墮せん、天に呼び地をたたくといへども、さらに何の益かあらん、唯ね

厭離穢土

がはくはわが悲母、生死の由來を觀じて、早く世間のつとめを抛ちて、速に出
要の道にしたがへ、出離の最要路、念佛門にしかず、
そこをかういふやうな浮世にあつて、さうして淺間しい人間がその苦から離れ
る道といふものは、唯だ念佛門である。かういふことを、長く書いてお母様に
送つて居られるのであります。

厭離穢土

それから惠心僧都は

夫以れば三界は皆な苦なり、五蘊は無常なり、苦と無常と誰かいとばざらん
や、然るにわれら無始よりこのかた、いたづらに生じ、いたづらに死して、猶い
まだ道心をおこさず、亦いまだ惡趣をまぬがれず、悲いかな、いづれの時にか、
まさに解脱して善根をうゑん、

と説いて居られるのであります。この穢れた世を厭ひ、淨らかな國を望むとい
ふことは、それはまことに深く念するところであるけれども、しかしながらそれ
には道心が起らなくてはならないのに、自分は道心もまだ起さないし、それから

觀無量壽經

念々に作る所の惡業が極めて多いから惡趣を免れることは出來ない。かういふ
風な有様であつては、何れの時にか解脱することが出來やう。そこで惠心僧都
はだん／＼考へて、さうして釋尊の説かれたと言はれるお經を引くり返して讀
まれたのでありますけれども、前に申した通り、その頃天台宗で主に讀んだお
經は主に法華經でありまして、その他のお經といふものはさう詳しくは詮穿し
なかつたらしいのであります。惠心僧都はさういふ自分の心の有様に目がさめ
て、厭離穢土のためにその目的を達すべき方法を説いてあるところの御經を探
がされたのであります。

觀無量壽經

惠心僧都は、法華經以外のお經につきて詮穿せられた結果、見つけられたのが
觀無量壽經でありました。惠心僧都は次のやうに説いて居られるのでありま
す。

抑々觀無量壽經を案するに、云く或は衆生あり五逆十惡を作りて、もろ／＼の
不善を具す、かくの如きの惡人惡業をもつて、まさに惡道におち、多劫を經歷

三の罪

して苦をうくること窮りなかるべし、かくの如きの悪人命終の時、善知識の種々に安慰して、ために妙法を説てをしへて、佛を念せしむるに遇へり、かの人苦にせめられて佛を念するにいとまわらず、善友告ていはく、汝もし念することあたはずば、まさに無量壽佛と稱すべし、かくの如く心をいたして聲をして絶ざらしめ、十念を具足して南無阿彌陀佛と稱す、佛名を稱するがゆへに念々の中に八十億劫の生死の罪をのぞき、命終の後に金蓮花のなほ日輪の如く、その人の前に住するを見て、一念の頃のごとくにすなはち極樂世界に往生することを得、

かういふ文句を讀まれて、惠心僧都は觀念の念佛から稱名の念佛へと進まれたのであります。自分といふものを棚に上げて置いて、或は極樂の相を考へ、或は地獄の相を念じてもそれは、畢竟一場の話柄に過ぎぬのであります。

三の罪

惠心僧都は深く内省して

夫身において三の罪をつくる、殺生偷盜邪婬なり。口において四の罪をつく

彌陀の本願(一)

る、妄語綺語惡口兩舌なり。意に於て三の罪をつくる、貪欲瞋恚愚癡なり。かういふやうに、惠心僧都は自分の心の淺間しいことをつくぐと考へられた結果、そのお經の中に、
『極重惡人、無他方便、唯稱彌陀、得生極樂』といふ文句に遭遇して、それにひごく突當られたのであります。自分の心の淺間しいといふことを考へ、自分の罪の深いことを考へ、それでどうすることも出来ないといふことを知られたところで、かういふ深い罪を犯すやうな悪人は別に道はない、唯だ彌陀の名を稱へることによつて極樂に生れることが出来るといふことによりて、自分の心を轉換することが出来たのでありませう。

彌陀の本願(一)

或る時、宇治の平等院で惠心僧都が説法せられたことがありましたが、その法座の上に木の葉が落ちました。惠心僧都がそれを取つて御覽になつたところが、その木の葉に虫食の文字がありました。「極樂へ行く船の便りに」といふ歌の下の句がその木の葉に虫喰のままにあつたといふのであります。これは作り

話でありませう。それは兎も角も『極樂へ行く船の便りに』といふ句があつたと考へればよいのでありませう。それで惠心僧都は聽衆に向いて『ごなたでもこの上の句をお詠みなさい』と注文せられたのであります。ところが誰も詠まないで、惠心僧都が自から詠まれました。それは「法の道しる人あらば渡すべし極樂へゆく船の便りに」といふのでありました。澤山の人はそれを聞いて一同感に入つて歸りました。その中に一人の老婆が居りまして、一人残つてさめ／＼と泣いて居りました。惠心僧都がこれを見て、『人々は皆な下向するのにお前一人後に残つて泣いて居るのはどういふわけか』と聞かれました。そのとき老女が申すのに『今の上の句を聞いてまことに悲しみに堪えませぬ』といふのであります。惠心僧都は『我が詠みたる上の句を聞いて何を悲しく思召さるや』老女いふやう、『法の道を知りたる人こそは此船の便りに極樂に行かんずれども、われ等如きの罪惡深重なる法の道知らぬものは、此船の便りに極樂に行くこと叶ふまじと存じて悲しむなり』惠心僧都はこれを聞かれて『なる程尤もだ、どうか一つあなた上の句を附けて下さい』と言はれましたところが、老女が「法の道知るも知らぬも渡すべし極樂へ行く船の便りに」とよみました。惠心

僧都はこれ聞かれて、『さて／＼御身は凡人にまします、誠に彌陀の本願によく叶ひたる上の句なり』と感じられました。そのとき老女は『我はこれ西方淨土の教主なり』と言つて光明を放ち紫雲たなびき云々とありますが、これは固より事實を莊嚴した話でありませう。まことに法の道を知るといふことは、どこまでも學問でありまして宗教ではありませぬ。法の道を知らぬ人が、渡されねばならぬのでありますから、一切の人々はただ稱名念佛によりて救はれるべきであります。

彌陀の本願 (二)

法然上人が説かれたことが和語燈に載せてあるのを見ますと『極樂世界にもれたる法門なきがゆへに』と言はれて、いろ／＼教があつてもどの教でも極樂に行くことが出来るのであります。しかしながら『ただしいま彌陀本願の意はかくのごとくさこれにはあらず』とありまして、念佛の法門は斯くの如く悟れといふのではなく、『ただふかく信心をいたしてこのふるものをむかへんとなり』とあります。唯だ信心をして稱ふるものといふのであります。法然上人は

それを説明して、

『耆婆扁鵲が萬病をいやすくすりはもろく／＼の木、よろづの草をもて合薬せりといへども』

耆婆といふのは印度の名醫で、扁鵲といふのは支那の名醫であります。その耆婆扁鵲がいろ／＼の病氣を治すのはいろ／＼の木やいろ／＼の草を合せて薬を調合するといふのであります。

『病者はこれをさとりて、その薬草何分、その薬草何兩和合せりと知らず、しかれども是を服するに萬病こと／＼くいゆるごとし』

醫者の薬を、これは何がいくら這入つて居るといふことを知らなくても、その薬を飲めば病氣が治るのであるといはれるのであります。

『ただうらむらくはこのくすりを信せずして、わがやまひはきはめてをもし、この薬にてはいゆる事なからんどうたがひて服せずんば、耆婆の醫術も、扁鵲の秘法もむなしくしてその益あるべからざる如し』

薬を飲んで治るのは、その薬をのめば治ると信するからで、これは何がいくら這入つて居るといふことが判つて居なくてもよいのであります。

唯信

『彌陀の名號もかくの如し、その煩惱惡業の病きはめてをもし、いかがこの名號をこなへてむまるることなからんと、うたがひてこれを信せずば彌陀の誓願、釋尊の所説むなしくして、そのしるしあるべからず、ただあふぎて信せずし、良薬をえて服せずして死することなかれ』

かやうに法然上人が説かれたのは、自分の計ひといふものを離れて唯だ信するのみであること、かういはれるのであります。

唯 信

そこで唯信するといふことが重要な問題であります。いろ／＼思考したり、判断したりして、さうして後に信するといふのではなくして、ただ信するといふのは、全く自分の計ひを捨てることでもあります。さう信することが正しいからと言つてそれを信するのではありませぬ。たとへば、惠心僧都にしても、後の法然上人にしても、全く自分といふものの力のないといふことを十分にさとられたのであります。さうしてその後唯だ念佛することが出来たのであります。釋尊が一生懸命修行して佛になれと言はれるのでも、その奥に法を信すること

によりて修行してゆかるのであります。それ故に、唯信するといふことは、全く自己の内観によりて自己の力のないことを十分にさとつたときの心持でありまして、唯だ念佛より外にはないことが當然であります。親鸞聖人は「唯はただこのことひとつといふ、ふたつならぶことをきらふことばなり。また唯はひとりといふことなり。信はうたがふことなきなり。すなはち眞實の信心なり。虚假のはなれたることなり、虚はむなしといふ、假はかりなりといふ、虚は實ならぬをいふ、假は眞ならぬをいふなり。本願他力をたのみて、自力をすつるをいふなり。これを唯信といふ。……また唯信はこれ他力の信心のほかに、餘のことならばすとなり」と説明して居られるのであります。これにてもよく知られるやうに、唯信するといふことは疑はぬことであると申して差支がないのであります。彼れ此れとはからふことをやめて、ただ念佛を申すのであります。自力を捨てて本願他力をたのむのであります。

寶物集

この前に空也上人の念佛と、恵心僧都の念佛のことにつきて、大體のところをお話いたしましたのでありますが、それは段々と彌陀教といふものを説明するためであります。今日お話をするのは、その続きであります。空也上人でも、恵心僧都でも、その當時の天台宗の學者でありまして、全く専門の方であります。當時さういふ専門の學者でなく、又僧侶でなく、しかも佛教のことを心がけて居つた人が少なからずあつたのであります。それは沙彌と申すもので、僧侶でなく、しかしながら全くの俗人でなく、僧侶と俗人との中間の風俗をして、さうして佛教の修行をして居つたのであります。かういふ人々のことにつきてお話を致すことは彌陀教といふものを理解する上に都合のよいことでもありますから、そのこともお話を致さうと考へるのであります。今日はその前に、平の康頼といふ人が作つた「寶物集」といふ書物に就て一寸、お話を致して置き度いと思ふのであります。この平の康頼といふ人は、前にお話した空也上人や恵心僧都よりは後の人で、平安朝時代の末の頃、源平時代の人であります。朝廷に事へて

寶の數々

官は檢非違使に至つたのでありますが、平清盛が大變に暴虐であつたのを憤慨して藤原成親といふものが、平家滅亡の陰謀を企てたのに加擔した。その陰謀が露見をして俊寛僧都と共に硫黄ヶ島に流されたのであります。それが治承元年で、それから硫黄ヶ島に三年ほど流されて居りましたが、許されて京都に歸つたのであります。流される途中法体になつて、平判官入道といはれた位に佛教に志のあつた人で、京都にかへつてから後にこの「寶物集」を著はしたのであります。

寶の數々

この書の内容は康頼が硫黄ヶ島より京都にかへつた后東山の別荘に塾居して居つた。ところが友達の誰彼が康頼の生きて還つたのを喜んで訪問し、いろいろの話をした中に、康頼が不在の中に世間の様子が益々悪くなつた。それで三國傳來の嵯峨の釋迦如來も淺間しがつて、天竺へ歸らむとする夢想の沙汰があつたといふことで、多くの人々が參籠するといふことを聞いて、康頼も驚いて嵯峨に參詣して通夜をして居ると、同じく參籠した人々の雜談の中に、世の中

何^〇が^〇第^〇一^〇の^〇寶^〇で^〇あ^〇る^〇か^〇とい^〇ふ^〇こ^〇と^〇が^〇問^〇題^〇と^〇な^〇り^〇、^〇こ^〇れ^〇に^〇つ^〇き^〇て^〇種^〇々^〇雜^〇多^〇の^〇問^〇答^〇が^〇行^〇は^〇れ^〇た^〇ので^〇あ^〇り^〇ま^〇す^〇。一^〇人^〇が^〇い^〇ふ^〇に^〇、^〇そ^〇れ^〇は^〇隱^〇簀^〇とい^〇ふ^〇もの^〇が^〇第^〇一^〇の^〇寶^〇で^〇あ^〇る^〇。この隱簀といふものを持つて居るといふと、思ふことが何でも叶ふ、食ひものが欲しいと思へばすぐにそれが得られる。又人が隠れて居つて何か話をして居ればそれを聞くことが出来る、又自分を隠して人に見せないといふことも出来る。さればこの隱簀といふものこそ、人間第一の寶であらうと言つた。そこで他の一人がいふには、しかし欲しいと思ふて他人のものを取るなんといふことはよくない。それは盗人だ。龍樹菩薩は身體を隱す術を知つて居られたけれどもそれで失敗せられた。さういふものは決して寶とは言はれないと非難した。次の人がいふには打出小槌といふものが一番の寶だ。この槌で以て何でも叩き出すことが出来る。この位善いものはないといふと、又反對説が起る。叩き出すと言つても出たものが變手古なものでは困る。又實際さういふものがあるか無いかそれわからぬ、それで打出の小槌が第一の寶とは言はれない。いや、第一の寶は金だ、金といふものがありさへすれば火にも焼けないし、水にも朽ちないし、光を増すばかりだ、千兩の金といへば大したやうに思ふけれども、

小さい箱に入れて持つて行くことが出来る、金さへあれば何でも自由であるから、これが一番の寶だ。かういふと、又反對の説が出る。金が寶であると言つても、これまで金のために命を失つた人もあつたし、持つて居る金がさう長くある譯ではないし、泥棒が来て取られることもあるし、又有るものが自然になくなるといふこともあるし、それ故にそれを第一の寶といふ譯には行かない。さうすれば玉が第一の寶であらう。お經にも如意寶珠といふものが寶だと書いてあるから、これが確かに一番の寶だと、さういふと又反對の説が出る。玉があつたと言つても、併し人間が暑いときにそれが寒くなる譯はない。又寒いときにそれが暑くなるわけではない、それだからして本當の寶ではない。さうすると、次に一番の寶は子である。子供といふものは親として實に尊重しなければならぬものだ。これにも反對の説が出た。それはよい子ならよいけれども、その子供が親を虐めたり、泥棒をしたり、いろんな悪いことをしたりすると却つて子は無い方が善いといふやうなことになる。それだから子寶と言つても、それも第一の寶ではない。その次にはそれならば命が寶だ、人間といふものは命が一番大切である、それだからして命が第一の寶だ。昔玄奘三藏といふるらい人がお經の

翻譯などせられた、大變偉い人であつた。ところが旅行中に泥棒に會はれて持つて居るものを澤山に取られた、そこで人々が見舞を申し上げた、さうすると、玄奘三藏は少しも嘆かるる氣色がなく、平氣で居られた、そこで人々驚いて、斯様に澤山物を盗まれたまふたのにさういふわけでさう平氣で嘆きの色をお現はしにならぬかと聞いた、ところが玄奘三藏が言はれるのに、成程澤山なものは盗まれたけれども、しかし自分の一番の寶である命は盗まれなかつたから、自分はさう嘆きには思はぬと言はれたと、かういふ話もある位であるし、命を惜まぬといふ人間はない筈だから、命といふものが第一の寶といふべきであるといふと、それにも反對の説が出る。命は都合がよければいいけれども、都合が悪ければ死にたいと言ふ人もあるし、又死んだ人もある、さういふ風に命を惜まずに死んだ人もあるし、命が惜いとも限らぬ。それで命が第一の寶とも言はれない。かういふ風に多くの寶を數へて、これが第一だと言つてもどれも非難がありまして、多くの人が賛成しなかつたのであります。その時、そこに居つた僧侶は口を出して、何と言つても寶は佛法に如くものはない。人の身で何が第一の寶であるかと言へば、それは佛法であるといふたので、世間第一の寶は佛法である

宗教の價值

といふことに話がきまりて、そこでその僧侶は佛法の話をして、佛法といふものは無常を知るといふことが大事である、無常といふものを知りて、さうして露のやうな命に執著せず、幻のやうな世界に愛著を起さないで、さうして淨らかな佛の國に往生するといふことが主眼である。この位實はないと言つたといふことを話の種として、康頼が佛法の俗解といふやうな書物を著はした。これが「寶物集」といふものであります。私が今、さういふものをもち出してここにお話を致すのは康頼といふ人が佛教の専門家でないからであります。佛教の専門家でない人が、平安朝時代の頃に、佛法につきてどういふやうに理解して居つたかといふことを考へて見たいからであります。

宗教の價值

いろ／＼の寶を數へて、その價值を批評して、遂に佛法が第一の寶であると決定したといふことは如何にも正しい考へ方であると思はれるのであります。この頃の時代に宗教といふ言葉もなし、又宗教と言へば佛法だけであつたと言つてもよい位でありましたから、佛法が第一の寶であるといふことは、今日で言へ

ば、**宗教が第一の寶**といふことと同じ意味のものであります。言ふまでもなく、人間にはいろ／＼の大切なことがあるにはきまつて居りますが、しかしその大切なものの中で實際我々人間として生活して行くのには先づ智慧のはたらきが必要であります。智慧がなくては我々は到底生活を續けて行くことは出来ぬのであります。外の暑いを暑いと知り、寒いを寒いと知るといふやうにすべてのことを自分で知つて行く精神のはたらきを智慧といふのであります。それが第一に必要であります。若しその智慧といふものがなかつたならば生活をすることは先づ出来ずまい。若しさういふ風な智慧のはたらきのない人間が生れたならば、それは生活することは出来ずして直ぐに死亡するのであります。その智慧のはたらきが根本となりて、人間はいろ／＼のことがあらはれて居るのであります。或は學問といふものがあり、地位といふものがあり、或は名譽といふものが出来るのであります。かやうに種々雑多なることがあらはれる中で、最も大切だと考へられるのは學問であります。さうしてこれは知識を集めるのであります。しかしながら、いくら知識がありましても、人間としての道といふものがないならば、社會的に生活して行く上に忽ち障礙をあらはすのであ

ります。それ故に、昔から人間の道といふものが喧しく説かれて居るのであります。仁義禮智信と約めて言つて居りますが、その仁義禮智信といふものを主として昔から人間の道といふものが説かれて居るのであります。そこで人間は學問がなくてはいかない、地位がなくてはいかない、門閥といふものが必要である財産といふものが大切であると言つて噪いで居るのであります。なるほど、かういふやうに考へれば、隱簀といふものがあつて、それを着れば人の方が見えて自分の方は向ふに見えないといふことは大變都合のよいことでありませう。しかしながらさういふことが果してごれだけの値打がありませうか。金にしても或は門閥にしても或は地位にしても、或は學問にしても皆自分といふものを外方に押し出して、生かして行かうとするために用ひるものであります。實際には、皆自分といふものを殺すといふ結果を示して居るのであります。それによつて自分といふものを人の前に出さうと思つてやるのが結局人の前に出て居るのは醜い自分であります。自分はゑらいと思ふて人の前に出しましても人はゑらくないとして自分の價值を消してしまふのであります。出さうと思つて却て引込められるのであります。自分は正しいと、そんなことを言ふ人は他の

人からは正しくないと思はれるのであります。しかるに、今日我々が努めて居るところは全くその方面でありまして、ごうかして人の上に立たう、ごうかして人よりもゑらくならう、ごうかして人よりも金を餘計持たう、ごうかして人よりも褒められよう、といふやうなことを考へて居るのでありますから、それに相應するものは寶としようとするのであります。しかしながら、それは結局その何れも寶ではないのであります。何が大切であるかと言へば、これまで屢々お話をします通りに自分といふものが一番大切でありませう。その一番大切な自分を善くして行くといふものが第一の寶でありませう。隱簀が寶であるとしても、打出の小槌が寶であるとしても、金が寶であるとしても、或は命が寶であるとしても、子が寶であるとしても、何と言つても結局それ等は本當の寶ではなくして、さういふ心のはたらきをするところの自分といふものの中を見て行くところの宗教といふものが、第一の寶であるといはねばなりません。康頼の「寶物集」に書いてあることはこの意味に於て宗教の價值を示したものであります。

全體、我々人間の心のはたらきは、智能のはたらきと、さうして感情のはたらきと、かう二つに別けて見ることが出来るのでありますが、その智能のはたらきといふものは自分といふものを保存するために、外の方に出てはたらくものであります。それ故に、智能といふものは人から人へ傳へることが出来るものであります。智能のはたらきによりて集めることの出来た知識といふものは甲の人から乙の人に注込むことが出来るのであります。しかるに、感情といふものは、智能と同じやうに自分を保存するためのはたらきでありますけれども、それは自分の内の方へ出て来るものであります。それ故に人に示すことが出来ませぬ。たとへて申せば、今日は風が吹くといふことを智能のはたらきによりて知るときには、今日は風が吹くと言つて人から人に傳へることは出来ますが、風が吹いて都合が悪いか善いかといふやうな心持は感情として人々皆違ふ筈であります。さう自分の心持を人に傳へることは出来ませぬ。ところで、その二つの精神のはたらきの中で、人間として生きて行くには感情といふものの方が大切であります。それ故に生れたままの赤坊には智能のはたらきはまだ十分にあらはれませぬが、感情は已に生後第一日からあらはれて居るのであります。

知るといふことは自分の氣に入らぬものを除き、自分の氣に入つたものを取るといふことが出来ますけれども、しかしながら感情としてあらはれるものはさう勝手にはまゐりませぬ。たとへば今暑いと感ずる、暑いといふのは感情として出て来たのであります。からそれはどうすることも出来ないものであります。暑いのを暑いと思つてはならぬと申ししても駄目であります。我慢は或る程度までは出来ますけれども、結局我慢は役に立ちませぬ。智能の方面のことは我々の勝手にいかやうにも考へることが出来ますから、實を數へる場合にもそれがいろ／＼に勝手に考へられるのであります。しかしながら感情のはたらきはさうではありませぬ。従つてその方の始末は容易でないのであります。或は我慢する。或は諦める。或は練習をする。或は修行をするなどの手段によりてそれをどうかしようとしても結局それは駄目であります。それかと申して、それをほつて置くといふことは出来ないのでありますから、そこでどうすればよいかといふことになる。ただ宗教と名づけられる心のはたらきがそこに何時でもあらはれるやうにならなければなりません。さういふ意味に於て宗教が人間の第一の實であるといふことは今日我々の知識から申しても正しい言ひ方で

あると思ふのであります。

佛道修行

しからは如何にしてその宗教といふものを修めることが出来るかと申すと、『寶物集』に書いてあるところに據りて見ますと、第一に我々は無常を觀し、無常の身を以て無常の世界に長くごまることが出来ないといふことを知りて、身體に執著するの心を離れて、早く淨土に往生して、さうして涅槃の悟を開くべきものであると書いてあります。これが佛道修行の大意であります。これは無論、今から七百年ばかりも前のことでありまして、宗教といふものの説明もまだ今日のやうには十分でなかつたのでありますから、この『寶物集』に書いてあることが、文字通りにそのまま今日に通用することは考へられないのであります。しかしその當時の人々がどういふ風に考へて居つたか、天台宗などの學僧達を除いて、俗間に居る人がどういふ風に考へて居つたかといふことを知ることが必要でありますから、この書物によつて佛道修行のことを説明しようと思ふのであります。

往生の十二門

『寶物集』には淨土に往生する道を十二門として擧げてあります。『第一には道心を發して出家遁世すべし』菩提心を發して家を離れ、世を遁れて佛道を求むるといふことが第一の道であるとかういふのであります。『第二に深く三寶を信じ奉りて佛に成るべしと申す』三寶といふのは佛・法・僧の三つであります。釋尊を父の如く思ひ奉り、法華經を信じ又一切の僧に歸依すべしといふのであります。『第三に如來の禁戒を堅く持ちて佛となるべし』すなはち戒律を堅く持ち、道徳を堅固に行はねばならぬ。『第四に諸の行業を積みて佛に成るべし。』忍辱、禪定、恭敬、禮拜などの諸行を積むことが大切である。『第五に淨土に往生せんといふ願を發して佛道を成すべし』一切諸佛は願を離れては生ぜずといふ。『第六に生々世々の業障を懺悔して佛道を成すべし』我々人間は一日一夜を経るに八億四千の念があり、念々につくるところのものは皆三途に墮つるところの業であるから、その業障を懺悔せねばならぬ。『第七に諸の施を行じて佛に成るべしと申す』寶を施し法を施すのであります。『第八に觀念を凝じ

て佛道を成すべしと申す』觀念を凝すべしといふのは大體に自身の心を見ることとであります。觀心若しくは内觀であります。『第九に臨終の惡念をやめて佛に成るべし』まさに死なんとする時に惡い念を止めねばならぬ。『第十に善知識に値ひて佛に成るべし』『第十一に法華經を行すべし』『第十二に彌陀を稱念して佛道を成すべし』極樂といふは彌陀の淨土である、往生を願はむ人は皆心を一にして念佛を唱ふべしといふのであります。

天台宗の實際

かやうに「寶物集」に擧げてある往生の十二門といふものは、前にお話を致した通りに、法華經を讀む、それから眞言の行を修める、それからして禪觀を修する、それから菩薩戒を持つ、それからして念佛をするといふ天台宗の實際と同一のものであります。それ故に康賴の「寶物集」に記載してあるところは畢竟するに、天台宗の教説が通俗化せられたものであると申してよいと思はれます。天台宗の實際は法華經讀誦、眞言行、禪觀修、菩薩戒、念佛の實施であるといふべきであります。が、「寶物集」には更にそれが通俗的に示されて居るのであり

ます。それ故に觀佛と念佛とは同じ程度に行つたやうでありまして、それは所謂釋迦教であります。ところが今私がお話を續けて居るのは釋迦教でなくして彌陀教であります。さうして私の考へでは釋迦教といはれるものは本當の意味に於て、そのまま宗教にはなつて居ないもので、彌陀教といはれるものこそ我々の心持に眞實の宗教となつて現れる心持であると、かう考へて居るのであります。が、それも釋迦教の心持から轉入するものであります。そこで釋迦教の心持につきて段々とお話をすすめて居るのであります。

道德の心

佛道を修むるには先づ菩提心といふものを起さなければいけません。佛にならうといふ願がなくてはいけません。釋尊の説かれた戒律といふものを堅く持たなければいけません。又いろ／＼長い間に造り上げた業障を懺悔をしなければならぬ、或は惡い人に會うて教を聞かなければならぬ、或は法華經を讀まなくてはならぬ、或は念佛を申さなければならぬと、かういふ風に説かれるといふことはまことに道理至極のこととあります。誰人でも自分の心がよくないといふこと

を、自分で知つたならば、どうにかしてその悪い心をよくしようと考へることでありませう。悪いといふことを知らなければ兎も角も、已に悪いといふことを知つたならばそれを直さうとする心が必ず起きて来るのであります。これは全く道德の心でありまして、釋迦教に説かれるところもその大部分はこの道德の心を離れないものであります。悪い心を止めなければならぬとして、或はその悪い心持は世間から起る、家があり、妻子があり、いろんなことで苦しみが起るのであるから、家を捨て世を離れて自分の心を悪くする原因を取つたらいいと斯ういふ心持は起ることでありませう。出家遁世といはれるのはこの心持であります。しかし何をやつても思ふやうにいかぬ。さうすれば佛の力により、佛の慈悲にすがつて行くより外には仕方がないとして念佛を申すといふことになるのでありますが、その全體が道德の心であります。言ひ換れば廢惡修善の教であります。

智光と頼光

智光と頼光

奈良朝時代奈良の元興寺といふお寺に智光と頼光と二人の學生が居りました。

た。智光は學者でありましたが、頼光はさうでなかつたと傳へられて居ります。この二人は一緒に勉強して居つた、部屋も同じことでありました。ところが、頼光は年を取るまで學問もせず、物も言はず、唯ごろ／＼と寝てばかり居りました。そこで頼光が不幸にして死亡したときに、智光が考へるのに、頼光といふ人間は學問もせず、物も言はず、唯寝てばかり居つて死んだのであるから、今何處に生れて居るであらうかとしきりに心配しました。何しろ自分の友達だから智光は頼光がこんなところに生れて居るだらうと心配して居りました。ところが或る夜の夢に頼光の居る所に行きました。行つて見ると、實に立派な所でありました。これが極樂と聞いた所によく似て居ると思ひました。そこで智光は頼光に向ひてここは何處だと聞きました。さうすると頼光が言ふに、これは極樂である、お前が自分の生れて居るところを知らうと思つたから、知らしてやるのである。しかしお前はここに居るべきものではないから早く歸れといひました。さうすると智光が驚いて、自分は一生の間極樂に往生しようと思つて居るのである。それに極樂に來たものは直ぐに歸れとは何事かといひました。さうすると頼光が言ふに、お前は行業してゐないからここに居られない。つまりここに

居る資格がないのだから歸れといふのであります。智光は驚いてお前は學問もせず、物も言はず、唯々グウ／＼寝て居つてさうしてここへ來たのはどういふ譯かと聞くと、頼光がいふやうに、いや自分は元興寺で佛教を修行する時初めいろ／＼なお經を聞いて見て、ごうかして極樂に生れようと願つたところが、それは學問で行けることでないといふことがわかつたから、それで物を言はなかつた、唯彌陀の相を思ひ、彌陀の慈悲を思ひ、死んだならば必ず彌陀の國に行くといふことを唯念願して居つたから、それだから寝て居つたのである。お前はいろ／＼な書物を讀んで、さうして義理をよく知つたけれども、いくら智慧が十分にはたらいて居つても心が散慢して居るから駄目である、早く歸れと言つたのであります。智光は驚いて、それならばどうすれば往生が出来るか友達の情で教へてくれと頼むだ。さうすると頼光はさういふことは自分の知つたことでない、若しそれが知りたければ直接に佛様に問へと言つて、頼光は何處からか佛様をつれて來た。さうしてその佛が智光の前に出られたから、ごうしたら極樂に行くことが出来るかと聞いたら、佛様の曰く、佛の莊嚴を念じろ、淨土の莊嚴を念じろとあつたので、頼光がそれは凡夫の心では迎も出來ませぬから、ごうした

らよいでありまするかと思つたので、佛は何とも言はないで、自分の右の手を舉げて、右の手の中に小さい極樂を見せられたと、かういふところでその夢が醒めたと、かう「今昔物語」に記載してあるのであります。固よりこれは一とつたの夢物語であります、しかしながら學問によりて宗教の心があらはれるものでないといふことを明かに示して居るのであります。

教信沙彌

教信沙彌

今一とつたの話は、攝津國の島の下の郡に勝尾寺といふお寺がありまして、その寺に勝如といふ上人が居られた。道心が深くして、別に草庵を造つて十年間その庵に居つて六道衆生のために無言の行をして居られた。ところが、或る夜、人が來て戸を叩く、中では無言の行をして居るのだから物を言ふわけに行かぬ、それで咳拂ひをしてこの家に人が居るといふことを知らした。さうすると、戸を叩いた人が「私はこれ播磨の國賀古の郡の賀古の驛の北の邊に住みつる沙彌教信なり、年來彌陀の念佛を唱へて極樂に往生せんと願ひつるに、今日極樂に往生す、上人も亦某年某月某日極樂に迎へを得給ふべしと、この事を告げんがため

に來たるなり』と言つて歸つたのであります。勝如上人は大變に驚かれました、そこで無言の行をやめて弟子の勝鑑に命じて加古の驛へいつて見せしめられました。なるほど賀古の驛の北の方に小さい庵があつて、その前に死骸が轉がしてある、家の中に一人の婆さんと一人の子供が泣いて居たのであります。勝鑑が驚きてその故を問ふたのに答へて、『彼の死人はこれは我が年來の夫なり、名を沙彌教信といふ、一生の間彌陀の念佛を唱へ、晝夜怠ることなかりき、それ故に里人は皆教信を呼で阿彌陀丸といひしが、今夜死す、この童は教信の子である』と言ひました。勝鑑がこれを聞いて直ぐ勝尾寺へ歸つて勝如上人に告げた所が、勝如上人は涙を流して『十年の無言の行も教信の念佛に及ばぬ』と言つて、態々教信の所に行つて念佛を唱へられたのであります。かういふ話を書いてあります。くわしいことはわかりませぬが、兎も角も學問によらないで、又觀念によらないで、ただ念佛といふものを申して安心の生活を人であります。その心はまさに彌陀教の念佛であります。しかしながらそれはどういふ意味であるかといふことを詳しくお話することはこれから後に段々と致すことのであります。

源氏物語

この前お話をいたしましたのは沙彌教信、それは僧侶でなく、しかも俗人でなく、僧と俗との中ほごに居る人で、佛道を修めてゐた人が、平安朝の頃に隨分澤山居りました。それを沙彌といふのであります。その沙彌の中の教信といふ人のお話を致しました。それから康頼の「寶物集」のお話をしたのでありますが、それは専門家でない平康頼が佛敎のことを書いて居るのでありますから、その頃天下に行はれて居つた佛敎といふものが、専門家以外にどういふ風に傳つて居つたか、少なくとも民間の人がどういふ風にそれを知つて居つたかといふことを見るために、そのことをお話をしたのであります。その外に、平安朝から鎌倉時代の頃にかけて、佛敎の専門の書物でないものの中に書いてあるところをも少しばかりお話致さうと思ふのであります。固より多くの書物を擧げてこれをお話するものではありません。ただその主なもので多くの人々に知られて居る書物を申上げるのであります。その第一は「源氏物語」であります。これは紫式部が作ったもので、紫式部は誰も知つて居る人であります。その親も文

學の天才であつた人であります。兄の惟規といふものも文才があつたのであります。紫式部自身も文學の天才のあつた人であります。藤原宣孝といふもの妻となつて女の子が二人あつたのでありますが、宣孝が早く死んだので後家さんになつて、一生後家さんで通したのであります。上東門院に仕へて居るうちに「源氏物語」といふものを作つたのでありますが、これは隨筆のやうなものでありまして、その中には自分の考を書いた所もあるし、又自分の傳記のやうなこともあるし、その當時の風俗を寫したやうなところもあるし、いろ／＼な方面からこれを見ることが出来ませうが、その夕顔の卷に、夕顔の上が死なれて四十九日の佛事を比叡山の法華堂でした。そこで博士に願文を作らして死んだ夕顔の上を極樂に送つて阿彌陀佛に頼むといふ一段があります。その記事に『その人となくて、哀しと思ひし人のはかなきさまになりたるを、あみだ佛にゆづり』ゆづりと書いてあります。それから『きこゆるよしあはれげにかき出たまれば』斯う書いてあります。夕顔の上が死んで、その死んだ人間を極樂に送つて、さうして阿彌陀佛にゆづるといふのであります。ゆづるといふのは、現在では兎も角も後の世は佛の力によらなければならぬといふ意味でありませ

う。それから檜の卷の所に光源氏が女君の許にて『この世の濁をすすき給はざらむと、物の心を深く思はしたるにいみじく悲しければ』斯ういふ風に書いてありまして、それから『何わざをしてしるべき世界におはすらむ、おとぶらひにまうでて、罪にもかはり聞へばやなごつく／＼』と思はす、かの御ためにとり立てて何わざもしたまはむ日は人ごが聞えつべし、内にも御心のおにに、思はすところやあらむと、思しつづむほどに、阿彌陀佛を心にかけて念じ奉り給ふ同じ蓮にとこそは』といふ文章で、『なき人をしたふ心にまかせても、かげ見ぬ水の瀬にやまごはむ』といふ歌がそれにつけてあるのであります。その意味は、阿彌陀佛の慈悲の力によりて未來は必ず功德を得よとかういふのでありませう。さうして一番終の夢の浮橋といふ卷の中には、世の中といふものは夢幻のやうな無相なものであるから、そこで煩惱即菩提、生死即涅槃といふことをよく悟つて佛の國に往生しなければならぬといふやうなことが書いてあるのであります。無論此書は佛教のことを書いた書物でないといふことは言ふまでもないことではありますが、しかしその中に書いてある所を見ると念佛を申して未來を助かるやうにといふ思想が明かに認められるのであります。

和泉式部

上東門院に仕へた婦人の中に和泉式部といふ人があるのであります。この人は藤原保昌といふ人の妻で、歌の才に長じた人でありました。その頃有名な播州の書寫山に性空といふ高僧が居られました。その性空上人を一條天皇の中宮である上東門院が訪問せられたときに、和泉式部も隨行したところが、性空上人が會はれなかつた。そこで和泉式部が、

暗きより暗きにぞ入りぬべき

はるかに照らせ山の端の月

といふ歌を作つた。これは佛教の大切なお経である「法華經」の中に、暗きより暗きに入りて長く佛名を聞かず（從冥入冥永不開佛名）とあるのを引いて申したのであります。我々が暗いところから暗いところに入つて到底佛の名を聞くことがないといふ意味であります。ところが性空上人がこの歌を見られて出て會はれました。さうして佛の教を説かれましたので、上東門院も、和泉式部もそれを聞いて大變に喜んで山を下りたといふ話が傳つて居るのであります。

す。

名にしおはは五つのさはりあるものを

うらやましくも上ほる花かな

比叡山は女人禁制で婦人は登ることが出来ない、それは婦人には五つの障があるために叡山に上ることが出来ないのに、花が勝手に山の上に乗つて居る、まことに羨ましいといふ意味であります。別に書いたものが傳つて居るわけではありませぬから、和泉式部がどれ位の程度まで佛教のことを知つて居つたかわかりませぬけれども、しかしながら和泉式部がよむだ歌は澤山に残つて居りますから、その歌を讀んで見ると大體想像がつくのであります。

いかにせむいかにかすへき世の中は

そむけはかなし住めは住みうし

露を見て草葉の上と思ひしは

晴まつほどの命なりけり

實に諸行無常の有様を強く言葉にあらはして居るのであります。この罪の身は佛の身にまかして常住不變の淨土に往生するといふことがねがはしいといふや

枕草紙

うなことを考へたのでありませう。

物をのみ思ひの家を出てこそ

のどかに法の聲もきこゆれ

我々は始終物を思ふのであります。いろ／＼のことを考へ、いろ／＼の心配をするのであります。いろ／＼なはからひをするのであります。この思ひの家を出てはじめてのどかに法といふものが聞える意味でありませう。

枕草紙

清少納言の「枕草紙」の中には、法華八講のことが書いてあります。これはその當時非常に流行つたものでありまして、つまりお経を読む、それから禪觀を修する、それから供養する、それから參籠と言ひましてお寺に入る。殊にこの頃多く行つたのは、石山寺、京都の清水寺、さういふところに參籠するのであります。これは前にも申した通りに、天台宗の教では兎も角も、その頃實際やつて居つたことは法華經を読むこと、禪觀を修すること、眞言を修すること、念佛を申すこと、戒律を保つこと、これをやつて居つたのでありまして、それがその

今様

當時の佛教の實際でありました。「枕草紙」の中には又、

陀羅尼はあかつき讀經は夕ぐれ

と書いてありますが、その意味は眞言修法といふものは朝早くやつた方がいゝ、お経は夕暮讀んだ方がいゝといふ自分の心持でありませう。それから、

修法は佛眼眞言などよみたてまつりたるなまめかしうたふとし

遠くて近いものは極樂

尊くと思はれるものは九條錫杖と念佛廻向

かういふことが列擧してあります。これによりて見ましても、死しては極樂に往くことを願ひ、現には修法をなし、念佛を申すことなどが尊く見られて居つたものでありませう。

今様

この頃、今様といふものが流行つて居りました。これは後の今様とは異なり、歌ではありますけれども、主に佛さんのことを歌つたのであります。さうしてその中には阿彌陀佛がかなり多かつたのであります。「梁塵秘鈔」といふ書物

想佛戀

の中に載せてある今様の中に『阿彌陀佛の誓願ぞ、返すくも頼もしき、一度佛名を稱ふれば、佛にするぞと説き玉ふ』といふ今様があります。『彌陀の誓ぞ頼もしき、十惡五逆の人なれど、一度佛名を稱ふれば來迎引接疑はず』かういふのもあるのであります。この今様を一種の節で歌つたのであります。後の御詠歌、今の唱歌の類であります。『極樂淨土は一所、勤めなければ程遠し、我等が心の愚にて、近きを遠しと思ふなり』かういふのもあります。「源平盛衰記」は少し後ちに出來た書物でありますけれども、その中にも今様が載せてあるのであります。その今様は『心のやみの深きをば、燈籠の火こそ照すなれ、彌陀の誓をたのむ身は、照さぬところもなかりけり』といふのであります。それから源平二氏の時代に「往生講式」といふ書物が行はれて居りましたが、その中にも幾つもの今様が載つて居るのであります。

想佛戀

想佛戀といふのがあります。これは古の催馬樂の踊りであります。その踊りに合せて謠ふのでありますが、その歌は、『我等ひまなし彌陀佛を戀しき、此佛を

謠曲

常には忍ぶ必ず來り蓮に迎へよ、心かけ常には忍ぶ必ず來りてはちすに迎へよ』といふ類であります。古の催馬樂の舞踊の調子であります。斯ういふ種類のものが澤山あるのであります。

謠曲

それから謠曲といふものが、これは早いのは鎌倉時代に出來、多くのものは足利時代に出來たのでありますが、その中には佛教に關するものが澤山にあります。その中に柏崎といふ題のものがあります。これは柏崎に居つたある女の夫が死んで、その子が坊さんになつて信州の善光寺に行つた所が、そのお母さんが氣狂ひになつて、善光寺に尋ねて行くといふ筋のものであります。

僧「いかに狂女御堂の内陣へは叶ふまじきぞ、急いで出て候へ」
さうすると、

シテ詞「極重惡人無他方便唯稱彌陀得生極樂そこそ見へたれ」

狂いたる母はかう言ふのであります。極めて罪の深い我々は他に手段といふものはない、唯阿彌陀佛の名を稱へることによつて極樂に生れることが出來ること

いふことであります。

僧『是は不思議の物狂ひ哉、そも左様のことをば誰が教へけるぞ』

氣狂ひがかやうなことをいふので、坊さんがまことに不思議な氣狂だ、さういふことを誰が教へたかと聞くのであります。

シテ詞『教へは本より彌陀如來の御誓にてはましますや』

そこで教といふものは彌陀如來の御誓ひであると答へたのであります。

『唯心の淨土と聞しときは、この善光寺の如來堂の内陣こそは、極樂の九品上生の臺なるに女人の參るまじきとの御制戒とはそもされば如來の仰せありけるか、よし人には何ともいへ、聲こそしるべ南無阿彌陀佛』

そこで以てシテと地と交代で言葉をいふのであります。

シテ『釋迦は遣り』

地『彌陀は導く一筋に、ここを去ること遠からず、ここは西方極樂の内陣に、

いざや參らぬ光明遍照十方の誓ぞしるき、此等の常の燈影たのむ』

お經に書いてあるやうなことが書いてあるのであります。この謠曲は時代が随分後ちでありまして、法然上人の淨土往生の教が大分民間に擴つてから後のこ

とであります。

念佛往生

念佛往生

前にも申した通り、この汚い身體と惡い心とを彌陀にゆづつて、さうして彌陀の誓願によつて彌陀の國に生れることを願ふといふ考へは、平安朝の未より鎌倉時代にかけては廣く行はれたものであります。これを纏めて念佛往生といふのであります。一方に於てはこの念佛往生に對して諸行往生といふものが行はれて居つたのであります。天台宗では諸行往生を主としたのであります。お經を讀むとか、或は眞言を修することか、或は禪觀を修することか、さういふ風なことをして、さうして佛になることが説かれるのであります。前にも申した通り、その中に念佛といふものがあるのでありますけれども、それは矢張り一つの行であつたのであります。

如法修行

如法修行

かやうに叡山では諸行往生といふことが説かれて居るのに、それが山の下

方では念佛往生といふことが頻りに行はれて居たのでありますが、諸行往生といふことになる、如法修行といふことが必要であります。しかるに如法修行をしようといふことが、真面目であつたならば、自分のやうなものにはそれが出来ないと、いふことに気がつくのであります。自分の心を内省して如法修行が覺束ないと知るときに、佛の名を稱へて往生すべしといふ言葉はその儘直ちにこれを受取ることが出来るのであります。ただ如法修行といふことをのみ心にとめて法の如くに修行しやうと努力するものは、その機の如何につきて願慮せぬのであります。若し機の如何につきて願慮するときは諸の行を修めなければならぬが、しかしそれを修むることが出来ないといふのであります。さうすると『極重惡人他の方便無し、唯佛の名を稱へることによつて往生することを得るのみ』といふ言葉がその儘に受け取られるのであります。諸行往生といふものはそれを教として自分が努力するのみのことでありますが、念佛往生といふことはそれが全く我々の心に受け取られて、『もう他の方便はない、念佛して往生するのみだ』といふことになるのであります。

易行道

そこで再び「寶物集」のことに返るのでありますが、「寶物集」に佛に成る道を十二ほど擧げて、その最後に『彌陀を稱念して佛道を成すべし』とありまして、念佛といふことが出て居るのであります。さうしてその説明がしてあるのを見ますと、『經論を習ひ讀む功德も無量無邊にして佛道に至る道なり、然れども師なくしては習ひがたく本なくては讀む事なし』お經を讀むことが功德であるから佛になることが出来るのでありますけれども、師匠がなければ習ふことが出来ない、本がなければ讀むことが出来ない、『念佛は師なしといへども忘る事なし本なしといへども勤め安く、この度成佛の願を遂げん事叶ひがたきに依りて、先づこの念佛の功德を以て極樂の衆生と生れて三途の故郷へ歸らずして漸々に功德増進して、等覺妙覺の位まで至らん事を思すべきなり』とかう書いてあります。まことにかやうな念佛は易行道であると言はねばなりません。眞面目に生死の苦を離れようとして一生懸命に努力しようとして、常にその努力が無効であるといふことに気がついて、最早如何ともすることの出来ぬと

易行道

往生要集

ころへ、佛の名を稱へれば、それで苦しみの世界から離れることが出来るといふことを聞かば、一も二もなくそれに行くにきまつて居るのであります。

往生要集

それから「寶物集」には『彌陀を稱念して極樂に往生することを話せり、細かには惠心僧都の往生要集に見えたり』と書いてあります。惠心僧都のことは已に大略お話ししましたが、その「往生要集」は惠心僧都がその汚ない國を厭ひ離れて極樂を願ひ求めるがよいと言はれた空也上人の言葉にひびく感ぜられて、『厭離穢土、欣求淨土』といふ文句を第一に置いて書かれたのであります。それ故に「往生要集」は穢ない國を厭ひ離れるといふこと、淨らかな國を願ひ求めるといふこと、その兩方を詳しく書いてあるのであります。淨らかな國といふのは佛の國であります。穢ない國といふのは我々の國であります。しながら、これは皆我々の心の問題でありますから、國と言つても心のことを言ふのであります。佛の國といふものは要するに、佛の心であります。穢ない國といふのは我々の心であります。淨らかなる國を極樂といひ、穢ない方を地獄

といふのであります。

地獄極樂

そこで「往生要集」には地獄の相と極樂の相とが詳細に叙述してあります。

無論地獄極樂といふことは、前から人の知つて居つたことであり、固より、「往生要集」に初まつたことではありませぬけれども、しかしながら世の中の多くの人が地獄極樂といふことをよく知るに至つたのはこの「往生要集」といふ書物が出来てからのことであります。「往生要集」は漢文で書いたものでありますけれども、併し假名で書いたものも古くから行はれて居るのであります。それには地獄の繪などが載せてありまして中々恐しいのが澤山あります。さういふやうに「往生要集」が主となりて念佛往生といふことが段々と廣まつたのであると言はなければなりません。

横川法語(上)

惠心僧都の「往生要集」はかやうに穢ない國を厭ひ離れて淨らかな國に生れ

地獄極樂

横川法語(上)

ることを願ひ求めるべきことを説かれたので、それは全く念^〇佛^〇往^〇生^〇の説明に外ならぬものでありますが、まことに詳細なものであります。それを極めて簡単に約められたものが法語として行はれて居ります。「横川法語」といふのがそれであります。恵心僧都の傳記によりますと、「此法語は元往生要集の肝要をつづめて愚かなるもののために書あらはし給へるなり」と書いてあるのであります。「往生要集」の要點をば極めて肝要なところをつづめて愚かなる人のために書かれたものであります。それでその次に、「しかれば往生要集を披覽するに堪へざるひとくははこの法語を熟覽して翫味すればおのづから要集の意趣を得たるに異ならず、往生をねがふ人の安心起行この一紙の法語において必せりつくせり」と書いてあります。つまり「往生要集」の意味が法語であるといふのでありますが、その全文は次の通りであります。

『夫一切衆生三惡道をのがれて、人間に生る事大なるよろこびなり』
三惡道は地獄、餓鬼、畜生であります。

『身はいやしきとも畜生におごらんや、家はまづしきとも餓鬼にはまさるべし、心におもふことかなはずとも地獄の苦みにはくらぶべからず、世のすみう

きはいとふたよりなり、人かすならぬ身のいやしきは菩提をねがふしるべなり、このゆゑに人間にうまるることを悦ぶべし、信心あさくとも本願ふかきかゆるに頼めば必ず往生す。念佛ものうけれども悟ればさだめて來迎にあづかる、功德莫大なり、此ゆゑに本願にあふことをよろこぶべし、又妄念はもとより凡夫の地躰なりと、妄念の外に別の心もなきなり、臨終の時までは一向に妄念の凡夫にてあるべきぞとこゝろて念佛すれば來迎にあづかりて蓮臺にのるときこそ妄念をひるがへしてささりの心とはなれ、妄念のうちより申しだしたる念佛は濁にしまぬ蓮のごとくにして決定往生うたがひ有べからず、妄念をいとはずして信心のあさきをなげきこころざしを深くして常に名號を唱ふべし』

かういふ風に簡單で、しかも明瞭に念^〇佛^〇往^〇生^〇の意味が書いてあるのであります。

横川法語 (中)

いくら卑しい身に生れたにしても畜生より上である、又幾ら貧しき生活でも餓鬼には勝つて居るのであります。心に思ふことが叶はぬことが澤山ありまし

でも、地獄の苦しみにくらぶれば物の數ではありませぬ。世の中の住みにくいといふことはそれを厭ひはなれる原因になるものであり、人かすならぬ身のいやしきは菩提を願ふしるべさなるのであります。それ故に、我々は人間に生れたといふことをばよろこぶべきことであります。我々の信心はあさくとも本願が深いのでありますから、たのめば必ず往生するのであります。念佛も申しにくいこともあり、なまけることもあるけれどもしかしながら稱へれば必ずたすかるのであります。それだから本願にあふことを喜ぶべきであります。又我々の心を見ると實に煩惱具足であります。しかしながら妄念は凡夫の地躰であります。妄念の心の外に凡夫の地躰はないのであります。それ故に死ぬるまでは必ず妄念の凡夫でありますから、ただ念佛するより外はありませぬ。念佛して居れば必ず佛の來迎にあづかる。假令妄念のうちで申す念佛でも、それは蓮が池の濁にしまぬ如くである、それ故に妄念といふものには心配せずただ信心のあさいといふことをなげけといはれるのであります。

横川法語（下）

横川法語（下）

口稱の念佛

口稱の念佛

かやうな法語の文章をそのままに見るときは、我々の心持といふものは實に穢ないもので、さうして始終散亂するのである。さういふ心持を持つて幾ら念佛を申しても、その念佛といふものは役に立たないものであらうといふやうなことを考へないで、妄念は凡夫の地躰で、何時まで經つてもやまないから念佛すれば必ずたすかるのである。往生決定疑ひないのである。かやうに妄念をいはず、唯信心が深いか、浅いかといふことを考へるべきであります。かういふ言葉はそれを口にする人の全體の態度を明かにせねばその真相が窺はれぬものであります。それ故にこの横川法語の意味を解釋するには惠心僧都の全體の態度を明かにすることが必要であります。

惠心僧都の傳記に次のやうな話が載つて居ります。菅原文時といふお公卿さんは大變に文學が上手で詩など作るこの名人でありました。しかるに、佛教には至つて心の薄い人であつた。ところが年を取つて病氣になりました。もう死ぬといふ時になりて、その子の宰相某が、惠心僧都の所に來て、ごうか自分の

親に佛教の法を説いて貰ひたいと願つたのであります。惠心僧都はその子心に感じられました。そこで文時に對面せられました。さうして惠心僧都が言はれるのに、私は横川に持佛堂を建てましたが、その障子の色紙に觀無量壽經に書いてあるところの九品のことを詩に作つてその壁に貼らうと思ひます、さうしてそれを貴方に頼まうと思つて居るが、しかし貴方は病氣だからとてもその願は叶ふまいと思ひます、と言はれました。ところが菅原文時が言ふのに、いや病氣でも詩は作れませう。詩は作れませうけれども、私は九品といふことを知らない、一體、九品といふことはどういふことを言ふのですかと言はれた。そこで惠心僧都は九品の話をせられました。上品、中品、下品、この三品に上、中、下があり、併せて九品となるのでありますが、その下品、下生といふのは、一生涯の間悪いことのみをして一つといふことをしない、人が死ぬる前に火車が迎ひに来て、さうして地獄から獄卒がその火の車に乗せて追ひ立てて行く、その時に善知識が念佛を申せと勧められても、その人はもう苦しいから念佛することが出来ない、その時に善知識即ちるらい人が、ただ口に南無阿彌陀佛と稱へよといふに、十唱稱ふる時に地獄の火の車たちまちうせて清涼の風と變じ即ち極樂の不退地

に往生し、なか／＼此三界の火宅をはなる』といふのが下品下生であります。惠心僧都がこの話をせられたのを、文時はそれを聞いて、さうすれば自分等のやうなものも往生は疑ひないことだと言つて、それから念佛を怠りなく申した、さうして往生を遂げられたといふのであります。この説明は善巧方便であるとも考へられるのでありますが、しかしながらこの話によりて惠心僧都の念佛が口稱の念佛であつたといふことは明かに認められるのであります。

眞率の態度

菅原文時が惠心僧都の言葉だけで動かされたやうに考へるのは一應尤のことです。ありますが、しかし言葉だけではさう動かされるものではないと思はれるのであります。動かさるべきものが菅原文時の心にあつたことは勿論であります。それよりも尙ほ重大であつたのは惠心僧都の眞率なる態度であつたと思はれます。惠心僧都は横川からして毎年の正月天皇陛下の行幸のあるのを拜觀に出られたのでありますが、妹の安養の尼がそのことをあやしまれて惠心僧都に向ひて言はれるのに、『君はきはまりなき道心の人である、何の爲に年毎に出て

朝觀の行幸を見給ふぞ』それに對して惠心僧都が言はれるのに『昔の十戒のちからによりて今十善の位に生れ給へるなつかしさに見奉るのである。又大臣公卿はじめあやしの唐傘もちたるものいたるまで前世の戒力によりて上下の差別あるをみるにつけて、過去遠々の流轉のことをのみ觀せらるるゆるなり』上方を見れば天皇陛下、下の方を見れば物の數にも足らぬ唐傘持に至るまで、上下の區別がついて居る、それは過ぎ去つた長い間その人達が流轉した相に外ならぬものである。それをながめるために出て行くのであると、かう言はれたと傳記に書いてあるのであります。かういふやうに眞率の惠心僧都でありますから、惠心僧都が説かれた念佛往生は謙虛の心を本としてあらはれたもので、全く我を捨てて如來に歸命する心であつたことが思はれます。

念佛の擴布

念佛の擴布

かやうに念佛が平安朝時代から段々と廣く民間に行はれるやうになつたのは全く佛教といふものが漸次に宗教の性質を明かにするやうになつたためでありませう。固より佛教にはいろいろの論説がありますが、しかしながらその心の状態が念佛といふところまで來なくては宗教とはならぬのであります。それでその當時の學者が佛教につきていろいろの説明をなし、又これに關する書物も澤山ありまして、種々なる解釋は、してあつたのでありますけれども、それを銘々の心持の中に取込んでしまつたといふ場合には何時でも念佛でなくてはならぬのでありますから、さういふことからして念佛といふものが佛教専門家の手を離れて、段々と民間に廣く擴つたのでありませう。

専修念佛

専修念佛

平安朝時代の末から源平二氏の時代にかけて戦亂がつづきたる頃、法然上人が出られて専門的に念佛といふことを説かれたのであります。この法然上人の

法然上人

念佛は專修念佛と申すのであります。さうしてその專修念佛がどういふことであるかといふことを、これからお話をいたすのであります。それも念佛の教學上の説明をするものではありません。專修念佛といふものが、どういふ心持であらはれるものであるかといふことを、くわしくお話を致さうと思ふのであります。

法然上人

法然上人は美作の國の津山に近い田舎に生れた人でありまして、今でもそこに誕生寺といふお寺がありますが、その親に當る人がその土地の役人と喧嘩をして殺害されました。死ぬる時に復讐してはいかぬ、こちらが復讐すれば、又先方から復讐せられるのであるから、復讐することを止めて、出家をして菩提を弔つてくれといふやうなことを遺言して死なれた。そこでお寺に入つて修行されたのであります。ところが非常に偉かつたので田舎のお寺では持餘して、まだ十四、五の頃に京都に赴むき、比叡山に登つて天台宗を學ばれたのであります。しかるに出離の志が深かつたといふことが傳記に書いてありまして、天台

戒定慧

宗の學問をして、いろいろなことを知つたけれども、どうしても宗教の心持が起きて來ないので、そこで又、勉學の方針をかへて、眞言のことも研究し、華嚴、法華、三論すべての佛教の學問を修められたといふことでもあります。

戒定慧

法然上人はかやうに佛教の學問を深く修めて、その學問は上達しましたけれども、出離といふことは出來なかつたのであります。このことにつきて上人の傳記に次のやうに記されて居ります。或る時法然上人が言はれるのに、自分は出離の志が深かつたから、そこでもろくの教法を信じ、もろくの行業を修めた。そこで考へて見るのに、佛教といふものも、所詮、戒定慧の三學を出ることはないと申された。戒といふのは一口に言へば道德であります。遺德堅固に身を修めることでもあります。定といふのは精神の散亂を鎮めるのであります。慧といふのは智慧を磨いてものの道理を明かに知ることをつとめるのであります。結局、佛教といふものはこの戒定慧の三學を修めて行くのであります。これには小乗の戒定慧と、大乘の戒定慧、それから顯教の戒定慧と密教の戒定慧と

がある。法然上人は言つて居られるのであります。小乗であらうが、大乘であらうが、顯に説く教であらうと、顯に説かない教であらうが、皆戒定慧の三學に外ならぬものである。さうしてこれは皆釋尊の説かれることがさうでありますから、釋尊の説かれた教を指して佛教とするなら、佛教は戒定慧の三學を出るわけは無いのであります。

如法と應機

釋尊の説かれたる法を見れば、此の如くに戒定慧の三學であります。しかしながら我々の機に應じて始めて我々の宗教となるものでありますから、機を知るごいふことが第一肝要であります。法然上人は「わがこの身は戒行に在いて戒をもたず、禪定に在いて一もこれをえず」と告白して居られるのであります。自分は戒定慧の戒ごいふものは一つも出来ないご自身の機をなげいて居られるのであります。そこで法然上人は「人師釋して尸羅清淨ならざれば三昧現前せずごいへり、又凡夫の心は物にしたがひてうつりやすし、たごへば猿猴の枝につたふがごとし、まごに散亂して動じやすく、一心しづまりがたし、無漏

の正智なによりてかおこらんや」と自白して居られるのであります。まごに我々の心が散亂しやすきごは猿が木の枝を飛び渡るやうに、動じ易い。道徳も堅固には修められないのであります。さういふやうな心の状態にして、ごうして智慧を磨くごが出来ませう。そこで法然上人は「若無漏の智劍なくば、いかでか、惡業煩惱のきづなをたたんや。惡業煩惱のきづなをたたずば、なんぞ生死繫縛の身を解脱することを得んや。かなしきかな〜いかがせん」と痛歎せられたのであります。「ごに我等ごときは、すでに戒定慧の三學の器にあらず、この三學のほかには我が心に相應する法門ありや、我身に堪える修行やあるご、よろづの智者をもごめ、諸の學者にごふらひしにおしふるに人もなく、しめすに輩もなし」と、法然上人が熱心なる要求に促がされてその機に應ずるの道をたづねられたのは當然のごであります。しかるに當時の學者は何れも法然上人が要求せらるごころのものを與ふごをしなかつたのであります。

專念佛名

法然上人は、「なげき〜經藏に入り」と言つて居られますが、問ふてもそれ

に答へてはくれないし、考へても判ることではないから、そこで仕方なく經藏の中に入つてかなしみく聖教を讀んだと言はれるのであります。如法に見れば佛敎は戒定慧の三學を出ない。戒律を保ち、精神を鎮靜し、さうして智慧を磨くといふこと以外には佛敎は何物もないのであります。それは自分の機に應じないから、どうしたら善いかと學者に聞いたが、一向それが判らぬ。しかも出離の志が深かつたので、己を得ず自分でいろくのお經を讀んで見られたのである。さうすると善導大師の觀無量壽經を講釋した書物の中に、『一心專念彌陀名號、行住坐臥、不_レ同_二時節久遠、念々不_レ捨者、是名_二正定之業、順_二彼佛願_一故』の文句が見つかつたのであります。一心に専ら彌陀の名號を念じ、行住坐臥、時節の久遠を問はず、念々捨てざるもの、これを正定の業と名づく、彼の佛の願に順するが故にと、斯ういふ言葉を見出されたのであります。さうして、法然上人は、この言葉、殊に彼の佛願に順するが故にといふことがひごく自分の心に當つたのであると言はれたのであります。『文をあふぎもつばらこのことばをたのみて、念々不捨の稱名を修して決定往生の業因を備ふべし、ただ善導の遺教を信するのみにあらず、又あつく彌陀の弘願に順せり。順彼佛願故の文ふか

く魂にそみ心にこごめたるなり』と自白して居られるのを見てもこれを推察することが出来るのであります。

念佛爲本

そこで、法然上人は惠心僧都の「往生要集」を讀まれたところが、この書物の中に『往生之業、念佛爲_レ本』とあるのを見つけられた。又惠心僧都の「妙行業記」の中にも往生之業は念佛を先となすと書いてあるのを見つけられた。そこで法然上人は念佛が佛の本願に順するものであることを知り、念佛することによりて出離の目的を達することが出来るといふことがわかつたのであります。

善導と惠心

法然上人は覺起僧都が惠心僧都に問はれたことを擧げて、『念佛といふものは、それは事を行すのか、理を行すのか』との間に對して惠心僧都が『この萬境にさへぎり、ここをもて我ただ稱名を行するなり、往生の業には稱名尤も足れり』とあつたのを引いて、『我々の心は萬境にさへぎられるから心を信する

念佛爲本

善導と惠心

稱名念佛

のではない、本願をたのみのである。ただ佛の名を稱へるのである」と言ひて、更に『然らば則ち源空は大唐の善導和尚のをしへにしたがひ、本朝の惠心の先徳のすすめにまかせて、稱名念佛のすすめ長日六萬返なり』と言はれたのであります。

稱名念佛

かやうにして、法然上人は、念佛を以て出離の志を満足することが出来たのでありますが、それは全く支那の善導大師が教へられた念佛でありました。我國では惠心僧都の「往生要集」に書いてあるところの念佛でありました。この念佛は、それより以前に行はれて居つたところの觀念の念佛に反して、稱名の念佛であります。佛の相を觀じ、佛の功德を念するのではなくして、ただ佛の名を稱ふるのであります。固より法然上人より以前には稱名念佛を明かに稱へた人はなかつたのでありまして、法然上人はこれを一つの宗派にせられたのであります。勿論他の宗旨でも、念佛はして居つたのでありますが、しかしそれを獨立の宗派としては居なかつたのであります。

淨土宗

淨土宗

已に前にも申した通り、觀念の念佛といふものは、本當の宗教の意味を有するところのものではありません。本當の宗教の意味を有するところの念佛は稱名念佛であります。そこで法然上人はこれを一つの宗派として、新に淨土宗といふ宗派を立てられたのであります。ところがそれに大變議論が起りました。何れの宗旨にも、念佛をして居るのに、更に念佛を以て一つの宗派を起すのはよくないといふ異論がありました。しかしながら、その異論は法然上人が説かれたる念佛の意味が當時の人に十分にわからなかつたためであらうと思はれるのであります。觀念の念佛といふものが頭に這入つて居る人々が多かつた時代でありますから、念佛といひましても、佛の相と功德を念じてさうしてその佛に絶らう、その佛のお慈悲を頂かうといふ心持で佛の名を唱へたのであります。法然上人はさういふ念佛でないといふことを、強く唱説せられたのであります。

ただの念佛

ただの念佛

明遍僧都

法然上人の念佛はただ佛の名を唱へるのであります。ただ佛の名を唱へるこ
いふことは、しかしながら口で言ふ時には、ただ佛の名を唱へるのであります。け
れども、心の中では、ただではないのが多いのであります。何か希望するところ
がありまして、佛の名を唱へれば幸福が得られるのだらう、その幸福を得たいた
めに佛の名を唱へるものが多かつたのであります。少なくとも死んだ後に地獄
に墮ちないやうに、極樂の方に行つて安樂の生活がしたいなごといふやうな希
望を持つて佛の名を唱へたものが多いのであります。ただ口で唱へて居るとい
ひましても、その内容は、ただではないのであります。けれども法然上人は何處
までもただの念佛といふことを主張せられたのであります。

明遍僧都

そこで、法然上人がごういふ意味で念佛といふことを言はれたのであります
かごいふことを考へるために、明遍僧都に向つて法然上人が言はれたことをこ
こに申し上げませう。明遍僧都は、非常に偉い人でありまして、少納言通憲とい
ふ人のお子さんであります。三十四の年に官を辭めて、さうして佛法に入られ

重病者

たのであります。當時無雙の碩學と評判せられ、四十五の時に僧都の位を授け
られやうとしたのでありますけれども、かたく辭して命に應じなかつた。隱遁
の志が益々深くして、その年五十四歳の時に京都を退いて高野山に引込まれた
のであります。ところが、その頃、法然上人の「選擇集」といふ書物が公にせら
れまして、その中に専修念佛のことが詳しく書かれたのを、明遍僧都が讀まれ
て、實にその議論が偏執であるご悪口を言はれたのであります。言ふまでもな
く、佛教と言へば、戒定慧の三學を修めねばならぬのであるのに、煩惱といふも
のは取れなくとも善い、ただ佛の名を唱ふれば必ず往生するそれは佛の本願で
あるから往生に間違ひはないといふのは、まことに偏執の説であると駁撃せら
れたのであります。

重病者

かやうに、明遍僧都は法然上人の説に反對して居られたのであります。ある
夜の夢に『天王寺の西門に病者のかすもしらすなやみふせるを、一人の聖の鉢
にかゆをいれて匙をもちて病人の口もとにいるるありけり、誰人にかあらんご

いふに、かたはらなる人こたへて、法然上人なりといふと見て夢さめぬ、僧都おもへらく、われ選擇集を偏執の文なりと思ひたるを、いましめらるるゆめなるべし、この上人は機と時を知りたる聖にておはしける』と「法然上人傳」に掲載してあります。明遍僧都が思はるるやう、法然上人といふ人は機を知つた人である、機といふのは法を受ける器でありますから、つまり我々の心であります。時といふことは釋尊から離れた末代の時代のことです。『病人の様ははじめには柑子、橘、梨子、柿などのたぐひを食すれども、のちにはそれもとまりぬれば、わづかにおもゆをもちてのごをうるはずばかりに命をささへたり、かくこの書に一向に念佛をすすめくれたるこれにたがはず』とあります。なる程、さう考へて見ると身體の丈夫なものはそれは固いものを食べられるが弱つて／＼既に病の爲に臥して居るものはおかゆでなければ駄目であります。戒定慧の三學の出来る人ならばそれでよいとして、さうでないものにはただ念佛を勧めるといふことはまことに機を知つた聖であること考へられたのであります。『五濁濫漫の世には佛法の利益次第に減す、このころはあまりに代くだりて我等のありさま、たとへば重病のもののごとし』釋尊が死なれて後ち餘程時代を距てて

居るから、自分等は重い病氣に罹つて居るやうなものである、『三論法相の柑子桶もくはれず、眞言止觀の梨子柿もくはれねば、念佛三昧のおもゆにて生死をいづべきなりけり』と忽に顯密の諸行をさしをきて、專修念佛の門に入り、その名を空阿彌陀佛とぞ號せられたりける』とあります。明遍僧都はその夢によりて忽にして自分の考を捨てて法然上人の言はれるやうな專修念佛に入り名を空阿彌陀佛と名付けて淨土の教に這入られたのであります。

彌陀の他力

法然上人が天王寺に居られた時に、明遍僧都が善光寺に參詣の途次、大阪を通られたので、法然上人に對面して、『このたびいかがして生死をはなれ候べき』と申された。法然上人はそれに對して『南無阿彌陀佛と唱へて往生をこぐるにはしかずとこそ存候へ』と答へられた。そこで明遍僧都は、そのことは私も承知して居るのでありますが、『ただ／＼念佛のとき心の散亂し、妄念のおこり候をばいか候べき』と質問せられたのであります。そこで法然上人は『欲界の散地に生をうけるもの、心ろゝに散亂せざらんや、煩惱具足の凡夫、いかでか安

生れつきの儘

念をごむべき、その條は源空も力をよび候はず』と申されて、妄念の起ることは是非に及ばず、『心はちりみだれ、妄念はきをひおこるといへども、口に名號をとなへば彌陀の他力に乗じて決定往生すべし』と申された。明遍僧都はそれを聞いて『これうけたまはらんためにまいりて候ひつるなり』とて、明遍僧都は法然上人の許を辭されたのであります。初對面であるのに、來た時にも挨拶せず、歸る時にも挨拶せず、世間普通禮儀の言葉を言はれず歸られたので、そこに居つた弟子の人々は驚嘆したのであります。

生れつきの儘

さて法然上人は、うちに入つてさうして『心をしづめ、妄念おこさずして念佛せんとおもはんは、生れつきの目鼻をとりはなちて念佛せんとおもはんがござしそれは出来ることではないと、斯う言はれたのであります。これを以て見れば、法然上人の念佛といふものは、ただ口に南無阿彌陀佛と唱へることでありまして、それ以上に何も自分のはからひは入らぬのであります。うまれつきの儘にて申す念佛であります。しかしながら、當時までの念佛は言はば自分の修行

教阿彌陀佛

の足らぬところを、佛の他力にすがるのでありますから、決してただの念佛ではなかつたのであります。それでただの念佛と聞いてもなほ不安でありまして、戒律を保ちて申す念佛と然らざる念佛とに、功德の相異があるやうに思はれたのであります。殊に魚を食つて口に魚の臭がして申す念佛でも善いかといふやうな質問がありました。さうすると法然上人は魚を食はないで往生するならば、猿が往生する、魚を食つて往生するのなら鶉が往生する、往生することは魚を食ふ食はぬといふことによらぬものであると教へられたのであります。

教阿彌陀佛

法然上人は、天野の四郎といふ嘗て強盜を働いたものが後に法然上人の弟子になつて、教阿彌陀佛と名乗つたものに對して、念佛のことを話されました。それは或時夜中に法然上人が起きてひそかに佛の名を唱へて居られた、それを隣の室で教阿彌陀佛が聞いた、咳拂をしたところが、法然上人はすぐに念佛を止めてしまはれました。教阿彌陀佛は不思議に思つたのでありましたが、その譯を質す機會がなくしてその儘に過して居りました。或る時法然上人が持佛堂に居

られましたので教阿彌陀佛はそこに行つて『私は縁がなくて京都に住むことが出来ないことになりましたから、これから相模國河村といふところに私の知合の者が居りますから、その人を頼つて行かうと思ひます。私も年を取つて居りますから最早貴方にお目にかかることも出来ないことと思ひます。私は無智文盲のもので教の深いことは判りませぬ、それを聞いたところが私には何にも判らぬ、ごうかお情に極めて要點のところを簡單に一言お示しを願ひたい、私はそれをかたみとして相模の國で終ります』と言つたところが、法然上人が言はれるのは、『念佛には深い意味はない、いかなる智者學生なりとも宗にあかさざらん、義をばいかでかつくりだしていふべき、ゆめ／＼甚深の義あるらんと、ゆゝしく思はるべからず』と申されました。それから又『念佛はやすき行なれば申す人はおふからうとも、往生するものすくなきは決定往生の故實をしらぬゆへなり』と申されて、それから言葉を改めて『去月に又人もなくて御房と源空とただ二人ありしに、夜半ばかりにしのびやかに起居て念佛せしをば御房はきかれけるか』と聞かれました、さうして後『それこそやがて決定往生の念佛よ、虚假ごと、かざる心にて申す念佛は往生はせぬなり、決定往生せんとお

かざる心

もはば、かざる心なくしてまことの心にて申すべし、ふがひなきおさなきもの、もしは畜生などにむかひては、かざる心はなければ、朋同行はいふにをよばず。その外つねになれ見る妻子眷屬なれども、東西を辨ふる程の者になりぬれば、それがたぬにかならずかざる心はおこるなり。人の中にすまんには、その心なき凡夫はあるべからず。すべて親きも疎も貴も、賤も、人にすきたる往生のあだはなし、それがたぬにかざる心をおこして順次の往生をさげざればなり』と申されました。されば飾る心も何もなく、唯佛の名を唱へるのがただの念佛といふものであるといふことを示されたのであります。

かざる心

我々は他人と一處に生活して居りまして、他人に對して自分のことを飾るものであります。さうかと言つて世の中のことでもありますから獨り居るわけに行きませぬ。しかしながら、かざる心にて申す念佛は駄目である。そこで法然上人は『いかがして人目をかざる心なくしてまことの心にて念佛すべきといふに、つねに人にまじりて、しづまる心もなく、かざる心もあらんものは、夜さしふけ

佛のみ知る

て見る人もなく、聞く人もなからん時、しのびやかに起居て百遍にても千遍にても多少心にまかせて申す念佛のみぞ、かざる心もなければ、佛意に相應じて、決定往生はごぐべき、この心を得なば、かならずしも夜にはかざるべからず、朝にても晝にても著にても、人のききはばかりなからん所にて、つねにかくのごとく申すべし』と教へられたのであります。

佛のみ知る

法然上人はかやうに、かざる心なくして申す念佛を説明して後に、更にそのことをくわしく説明せられたのであります。『たとへば盗人ありて、人の財を思かけてぬすまんごもおもふ心は底にふかけれども、面はさりげなき様にもてなし、かまへてあやしげなる色を人に見えじごおもはんごとし。そのぬすみ心は人まつたくしらねば、すこしもかざらぬ心なく、決定往生せんごする心も又かくのごとし。人おおくあつまりつらん中にて、念佛申すいろを人に見せずして、心にふるるまじきなり、其時の念佛は佛よりほかはたれか、これをしるべき、佛しらせ給はば、往生なんぞ疑はん』と申されました。教阿彌陀佛はそれに對

して『決定往生の法門こそ心得候ぬれ、すでにさとりきはめ侍り、この仰をうけ給はらざらましかば、このたびの往生はあぶなく候まし、但この仰のごとくにては人のまへにて念珠をくり、口をはたらかす事はあるまじく候やらん』と申し若し此教を承はらなかつたならば、この度の往生は出来なかつたのでありませう。仰のごとくこれからはその心を以て念佛申しませうと申したところが、法然上人が言はれるのに『さういふことがよくない、念佛の本意といふものは常念が本であるのである、だから念々相續しなければならぬ。たとへば世間の人を見るにおなじ人なれども豪憶あひわかれて憶病の者になりぬれば身のためくろしかるまじき、聊のいかりをもをぢをそれて逃げかくれ、豪のものになりぬれば、命をうしなふべきこはき敵の、しかも逃げかくれなばたすかるべきなれどもすこしもおそれず、ひとしさりもせざるがごとし、これかやうに、眞偽の二類あり、地躰いつはり性にして、かざる心あるものは身のために要なき、聊の事をもかならずいつはりかざるなり。もごよりまことの心ありて虚言せぬものは、聊の矯飾しては身のためおほきにその益あるべき事なれども身の利養をばかへりみず、底にまことありてすこしもかざる心なしこれみな本性にうけてむまれた

念佛者の用心

るところなり、そのまことの心のもの往生せんとおもひて念佛に歸したらんはいか成ぞ、いかなる人のまへにて申ともすこしもかざる心あるまじければ、この眞實心の念佛にして決定往生すべきなり」と申されたのであります。

念佛者の用心

それから、法然上人は念佛者の用心につきて『念佛の行は行住坐臥をきはぬ事なれば、ふして申さんとも、居て申さんとも心にまかせ時によるべし、念珠をり袈裟をかくることも又折により躰にしたがふべし、ただ詮するぞ威儀はいかにもあれ、このたびかまへて往生せんとおもひてまことしく念佛申さんのみぞ大切なる』と説教せられたのであります。教阿彌陀佛は非常に喜んで合掌禮拜してそこを退きまして、さうしてその翌日法蓮房と申す法然上人のお弟子の所に行つて、暇乞をした時に、昨日法然上人から聞いた決定往生の話をしたのであります。さうすると、その後法蓮房が法然上人に面會して教阿彌陀佛が私の所に來てかやう／＼のことを申しましたが、貴方はどういふことを教阿彌陀佛にお話になりましたかと聞いたのであります。さうすると法然上人が言はれるの

對機說法

に『教阿彌陀佛は舊盜人と聞いて居つたから對機說法をした。ところが暇乞をして歸る時の態度などを見るとあの男は多分本當の念佛といふものが判つたやうである』と申されました。教阿彌陀佛はそれから相模の河村に歸つて長く生きて居りましたが、その命の終る時に同行に向つて『自分の往生は決定して居る。必ず極樂に往生する、それは法然上人の教を信するが故である。一同の人々も法然上人に聞いて往生するがよからうと』かう言つて合掌念佛して死んだのであります。同行が後に京都に行つて法然上人にその話をしたところが、『さうであつたらう、自分もあの男が歸る時に多分あの男は念佛の意味が判つたやうに思つたから、多分さうであつたらう』と言はれたといふことであります。

對機說法

明遍僧都のやうな學者に向つて言はれること、天野の四郎といふ強盜の成り上りものに言はれたことは大變に異ふやうであります。明遍僧都に言はれたのはただ何事もなく佛名を唱へるのである。天野の四郎に言はれたのはかざる心をやめて佛名を唱へなくては駄目だといふやうに、對機說法をして居られ

親の名を呼ぶ

るのであります。

親の名を呼ぶ

要するに、法然上人の念佛といふものはその心を綺麗にして申す念法ではありませぬ。その行を修めて申す念佛でもありません。念佛には何等目的を以てゐないのであります。ただ佛の名を唱へるといふ意味の稱名念佛であります。しかしながら、さういふ稱名念佛が、我々の宗教の心持として最も進んだものでありませう。さういふ心持になりてこそ我々の宗教といふものが、本當の意味をなすものでありませう。法然上人の専修念佛といふものは、ただ口に南無阿彌陀佛と唱へるといふことであるといふことをば先づお考へを願ひたいと思ふのであります。さうしてただ南無阿彌陀佛を唱へるところに重大な意味があるのであります。それは佛の本願であるからであると言はれるのであります。かやうにただ佛の名を唱へるといふ時に一切の我を捨てて居るのであります。人間の親がその子供に對して念願することはいろ／＼ありませうが、それを引括めて言へば親の名を唱へるやうにさういふことでもあります。

専修念佛の辯明

専修念佛の辯明

かやうに、法然上人が専修念佛を唱道せられたその時まで、専ら行はれて居つた念佛は、前に申した通ほりに觀念の念佛、すなはち理觀の念佛でありました。さういふ理觀の念佛が行はれて居つたところに法然上人が、これを排斥してただ念佛して往生すると説かれたのでありますから、その教は多くの人々から反對を受けたのであります。専門家の方からいろ／＼の議論が起りまして随分やかましくなつたのであります。そこで法然上人も自分の説くところが佛教の所説と相異したものでないといふことを辯明せられました。その中で、お弟子の聖覺法印に示されたものは次の通ほりであります。

三途の業

三途の業

「一人一日中八億四千念、念念中所作皆是三途業。かくの如くにして昨日もいたづらにくれぬ、今日も又むなしくあけぬ。いまいくたびかくらし、いくたびかあかさんとする。それあしたにひらくる榮花はゆふべの風に散りやすく、夕

如來の金言

べにむすぶ命露はあしたの日に消えやすし。これを知らずして、つねにさかえんことを思ひ、これをささらずして久しくあらむことを思ふ。しかるあいだ、無常の風ひとたび吹きて、有爲の露ながくきえぬれば、これを曠野にすて、これをとをき山に送る。かばねはつゝに昔の下にうづもれ、たましゐは獨りたびの空に迷ふ。妻子眷族は家にあれどもともなはず。七珍萬寶はくらにみてれども益もなし。ただ身にしたがふものは後悔の涙なり』。法然上人は先づ、かやうに説いて、我々の心が眞實より離れて居ることを示して居られるのであります。まことに時々刻々、あらはれるところの我々の念は一日に八億四千と數へ上げるほどの澤山のものでありませうが、それが一々、三途の業であります。地獄に墮つる種であります。かういふ業を日に日につくりながら、それをわかまへず、無常の世界に住みながら、常住の心を持ちて、夢のやうに暮して居ることはいかに淺ましいことでもあります。

如來の金言

法然上人は、かやうに、我々の心が眞實から離れて居る有様を説きたる後に、

如説修行

それを救ふために釋尊が、一代の中いろ／＼の法を説かれたことを擧げて、『或は萬法皆空の旨を説き、或は諸法實相の心をあかし、或は悉有佛性の理を談ず、みなこれ經論の實語なり、如來の金言なり』と言つて居られるのであります。釋尊以來、佛教として説かれて居るところは、いろ／＼に別れて、隨分深い教になつて居るが、それは皆、釋尊の實語であると言はれるのであります。しかるに釋尊は『或は機をさとのへてこれを説き、或は時をかがみてこれをおしへたまへり』。これを聞く人の心に應じてこれを説き、又時代に鑑みて、人と時に適するやうに示されたのであるから『いづれか淺く、いづれか深き、ともに是非をわかまへがたし、かれも教、これも教、互に偏執をいだくことなかれ』と言つて、法然上人は各宗各派に説くところのものも皆、釋尊の金言であるから、それに深淺の判別をすべきものではないと示して居られるのであります。

如説修行

釋尊は人と時に應じて、理解の出来るやうに説かれたのであるから、いづれが深い、いづれが淺いといふ譯でなく、いづれも皆、釋尊の金言であるから、その

應機

教に説かれて居るやうに修行すれば皆悉く生死を離れることが出来る筈であります。『説の如く修行せばみなことごとく生死を過度すべし、法の如く修行せばともに同じく菩提を證得すべし、修せずしていたづらに是非を論ずること』はよろしくない。何れにしても釋尊の實説であるから、その説の通りに修行すればさざりを開くことが出来る筈であります。修行せずして彼此と議論することはよろしくない。法然上人は言はれるのであります。

應機

何れにしても釋尊の金言であるから、法の如くに修行すれば必ず悟を開くことが出来る筈であるから、修行せずして善し悪しを論ずることはよろしくない。しかしながら『廣く諸教にわたりて義を證せんとおもへば一期のいのちくれやすし』。限りある命を持ち、限りある智慧にて、諸の教にわたりてその教の深い味を探らうとすれば一生涯の間にはどうもすることが出来ませぬ。それ故に、我々は自身の心に應じて、これを修むることの出来る教に従はねばならぬのであります。如法といふことも固より大切であります。それは固より應機とい

凡夫往生

ふことを考へての後のことでもあります。いかなる尊き教も、それが機に應ぜざる時は全く無益のものであります。かやうにして、法然上人は善導大師の觀無量壽經の疏によりて一心に彌陀の名號を念ずる、これが佛の本願に順ずるものであるから、その教に従ひて専修念佛を往生の要とするのであると説かれたのであります。

凡夫往生

しかしながら、法然上人より前の高僧は、かやうに念佛の意味を考へて居られなかつたやうでありまして、善導大師流の念佛を高調したものは法然上人が始めでありました。それ故に、それを聞く人にもよくわからないし、又さういふ風な考をした人も尠なかつたのでありますから、それに對して反對の説があつたのも無理のないことでもあります。又法然上人がその反對の説をやわらげて自分の言ふことを通さうとせられたのも無理のないことでありませう。後ちに出られた親鸞聖人は、自分の信じて居る通りをその儘遠慮會釋もなく唱道して居られるのであります。法然上人はその時代の高僧達に遠慮して妥協的態度を

報土往生

取つて居られるのであります。これは無理のないことであらうと思ふのであります。初めてさういふことを言ひ出したのでありますから、随分困難なことであつたらうと思ふのであります。元來法然上人の言はれることは凡夫往生であります。凡夫往生といふことはゆるされなかつたことであります。どうしても聖者にならなければいけませんのであります。ところが後に天台宗になつてから凡夫が往生することが許されるやうになつたのであります。それより以前の他の教では、法相宗にしても、華嚴宗にしても、聖者、即ち偉いものとなつてから、往生するのであります。凡夫その儘の往生といふことは決して説かれなかつたのであります。

報土往生

天台宗では凡夫が往生するといふことが説かれました。しかしながら、その往生するところが、佛の國である、淨土であるといふのでありまして、しからは何處に往生するかと言へば頗る曖昧なものでありました。法然上人はこれを確定して報土とせられたのであります。報土に往生するのだと、かう決められ

餘行を捨つ

たのであります。かやうに、天台宗には凡夫が往生するといふことを説かれましたが、その往生の場所が曖昧であつたのを、法然上人は、はつきりと往生の場處を報土であること決められたのであります。法然上人の專修念佛がそれより以前のものと相違して居る主要の點はこれでありまして。

餘行を捨つ

それ故に亂想の凡夫、稱名の行によつて順次に淨土に往生すべき旨を判じて、念佛すれば出離の行はたやすく進むのであります。この世の中に住んで居る凡夫、それが彌陀の名號を唱ふれば、佛の本願に相應するものであるから、その本願に乗じて確に往生することが出来ること説かれたのであります。それまでの念佛は自分で努めてその力によりて往生するのでありましたが、法然上人は佛の本願により報土に往生することが出来ること言はれるのであります。かういふ考がきまつたのは、正安五年の頃でありまして、その時法然上人の年は四十三であつたといふことであります。十五の年に叡山に登られたのでありますから、それから約三十年の間、佛教をば廣く研究し、いろ／＼と修業せられて、その結

本願乗托

果、專修念佛の心持になられたのが四十三の時でありまして、此時に餘行を捨て、一向に念佛に歸したと書かれてあります。

本願乗托

如法に修行すれば佛になれるといふことは佛教で初めから説かれたことでもあります。しかしながら、修行して佛になるべきその修行が出来ない、その修行の出来ないものは念佛によつて佛になることが出来る。所が念佛して佛になるといひましても、凡夫ではいかぬ。偉い人でなければいかぬ。それ故に偉いものとなつて、さうして念佛しなくてはいかぬ。それ故に念佛といひますけれども、結局自分の修行の足りないところを念佛で補ふのであります。

しかるに、法然上人は凡夫がその儘往生するそれは決して修行によるのではない、自分でその心を磨いて往生するのではない、凡夫を往生せしめるといふのが佛の本願であるから、その本願に乗托すれば自からにして報土に行くことが出来るのである。そこでたゞその名を唱へる、たゞ稱名の念佛をするのであると、かういふ説でありまして、それより以前の説とは全く違つて居るのであります。

口稱三昧

す。

口稱三昧

法然上人は年四十三にして專修念佛の考を起されまして、それからは他の行をやめてただ佛の本願に乗るといふことを一生懸命につとめられたのであります。口稱三昧といひまして、念佛を始終口から離さないやうにするところまで進んで居られたのであります。さうして御自身に書かれたものによりますると、さういふところまで法然上人の心境が進むたのは六十六才でありました。四十三の時に專修念佛の心持が開け、それから進んで所謂口稱三昧に入られたのはそれから二十餘年の後でありました。

常持の言

常持の言

法然上人は此の如く、長い日月の間に、深い宗教的の體驗をせられたのでありますから、平生、言はれた言葉の中に、實に貴重なものが多くあります。その中に『人の命といふものは食事の時にむせて死ぬることもあるから、そこで南無

本願を信ず

阿彌陀佛とかみて南無阿彌陀佛と飲み入るなり、』とあります。これは我々の心をば始終、南無阿彌陀佛の中にはたらかすべきであると言はれるのであります。何時死ぬるかわからぬ食事が喉に詰つて死ぬこともあるから、我々は常に南無阿彌陀佛の中に生活せねばならぬのであります。又『南無阿彌陀佛といふことは別したる事には思ふべからず、阿彌陀佛我をたすけたまへといふことばと心得て心には阿彌陀ほとけたすけたまへとおもひて口には南無阿彌陀佛となふるを三心具足の名號とまふすなり』『我はこれ烏帽子もきざる男なり十惡の法然房、愚癡の法然房が念佛して往生せんといふなり。』かういふやうなことを法然上人は始終、言はれたのであります。固より自分の力を磨いて、自分の考へを纏めて往生しやうとするのではないから、それで智慧を捨て、善惡のはからひを離れ、いかなるものといへども佛の名を唱へることによつて往生することが出来るといふのであります。

本願を信ず

自分が一生懸命に努力して骨を折れば、その結果は必ず善いといふことは誰

他力の譬

にでもわかることではありますが、その反對に何等修行といふものをしなくともよい。たゞ佛の本願が強いから凡夫も助かるのであるといふことはわかりませぬ。或る人が法然上人に向つて『上人が申されるところの念佛は皆佛の心になつて居るのでありますから大變に功德がありませうが、自分等のやうなものは佛の心になつて居るのではありませぬから、ごうも自分等の念佛には、ごうも値打がないやうに思はれます』と申しました。さうすると法然上人が言はれるのに『さういふことを言ふのは本願といふものを信じないのである。阿彌陀如來の本願の名稱といふものは、木こり草かり、なすに水くむたぐひごときのもの、内外とりにかけて、一文不通なるがごなふれば、必むまると信じて眞實にねがひて、常に念佛申を最上の機とす。』といはれました。さうして、それから『もし智慧をもちて生死をはなるべく源空いかでか、かの聖道門に趣へきや、聖道門の修行は智慧をきはめて生死をはなれ淨土門の修行は愚癡にかへりて極樂にむまるとしるべし』と申されたといふことでもあります。

他力の譬

法然上人の教は、かやうにして、全く他力によりて往生するといふことであります。

そこで他力のことにつきていろいろと説明をして居られるのでありますが、或人の質問に答へて『世間の事にも他力は候ぞかし』と言つて、世間の事につきて他力を示めされたことにつきて、次のやうなことがあります。

『足なえ腰むたるものゝとをき道を歩まんと思はんにはねば船車に乗りてやすくゆく事、これはわがちからにあらす、乗物のちからなれば他力なり、』自分の腰がなえて、さうして足がなえて歩くことの出来ないやうなものは遠き道を自分の力では行けぬのだから、それだから船や車で容易く行く、所がそれは自分の力ではない、乗物の力であるから他力である、『あさましき悪世の凡夫の詭曲の心にてかまへつくりたるのり物にだも、かゝる他力あり、』それは世間の他力だが、今この五濁悪世の世に生れて、たゞ悪いことのみをする心で以つてかまへつくりたるその乗物にも矢張他力といふものはある、『まして五劫のあひだ思食さだめたる本願他力の船はいかだにのりなば、生死の海をわたらん事うたがひ思食べからず、しかのみならず、やまいをいやす草木くろかねをこる磁石、不思

議の用力あり、麝香はかうばしき用あり、犀の角は水をよせぬ力あり、これみな心なき草木ちかひをおこさぬげだものなれども、もごより不思議の用力はかくのごとくぞ候へ、まして佛法不思議の用力ましまさざらんや。』世間の事でも他力といふことがあるが、自分のやうな心の淺間しいものが、自分の淺間しい心でつくつて行く乗物にも他力といふものがある、自分の力ではいかぬ、その自分の力でいかぬものを佛の本願の船に乗りて、そして生死の海をわたることは疑ひないことであるから、それには磁石といふものが北を指し、それから草木の中に病を治すものもある、まことに不思議な力である。まして佛法不思議の力といふものは必ずましますものであるといふやうなことを言つて居られるのであります。

法爾の道理

それから法然上人は『法爾の道理といふ事ありほのほは空にのほり、水はくだりしまにながる。菓子の中にすぎものあり、あまき物ありこれらはみな法爾の道理なり』と言つて居られます。煙が高きに上り、水が低きに流れる。果物

自然に歸る

にすつばい物もあれば、甘い物もある。斯ういふことは自然の道理であります。『阿彌陀佛の本願は名號をもつて罪惡の衆生みちびかんどちかひ給たれば、たゞ一向に念佛だにも申せば佛の來迎は法爾の道理にてうたがひなし』そこで自然に隨順してつまり自然に従つて行くといふことが他方に順ずるものであります。元來人間といふものは自然の一つの分子でありますから、そこでその自然に従つて行けば何にも問題はない筈であります。しかるに、その自然に背くやうなことを始終して居るから、そこで苦みが起き、問題が起き、いろいろな難儀が現れて來るのであります。そこでその難儀をつくり、苦みをつくり得手勝手な考へをして居るところにその自分の悪い心といふものが止めばつまり自然に従ふのでありますから、自然に従へばその自然に隨順してさうして、さうして自然の國に行かれるのであります。

自然に歸る

善導大師が言はれた語に「隨佛逍遙歸自然、自然即是彌陀國也」とありますが、佛に従つて逍遙して自然に歸らん、自然はこれ彌陀の國であります。本願

自是他非

に乗托して報土に往生するといふことも畢竟するにかういふ心持であります。

自是他非

元來世の中には善いこともなく、悪いこともなく、苦しきもなく、樂みもないのでありませう。それが人間として生活する上に於て、或はそれを苦みとか、或はこれを楽しみとかに分け、或は善いとか悪いとかに分けるのであります。いつでもそれは自分に都合のよいものをとり、自分に都合の悪いものを捨て、行かふといふ自他非の心持が極めて強く出て來るので、それで苦惱といふものが起るのであります。これが煩惱具足の凡夫の心の常であります。それ故にこの如き凡夫が往生するところの道はたゞ佛の本願に乗托すべきのみであります。さうして佛の本願に乗托する道といふものはその現實の自分の心の相を眞正面に見てそこに何等手を出さないことにあるのであります。

煩惱具足

佛の本願はさういふ煩惱具足、罪惡深重のものを助けるといふのであります

極樂

から、その煩惱具足罪惡深重の相をそのまゝに見たものが佛の本願を知るのであります。煩惱具足罪惡深重の相をそのまゝ見て、それにつきて、何等のほからひをしないといふのはすなはち自然に隨順するのであります。自然に従へばその結果我々は必ず自然に歸る筈であります。かやうにして煩惱具足を自覺するものも必ず報土に趣くべきであります。報土は我々がどうしても行かなくてはならぬところであります。

極樂

普通の人の言ふてゐる極樂といふものは我々が行ふところ、どこであります。行きたいと願ふところであり、それ故に一生懸命修行して行かんと欲するところでもあります。けれども、それは到底行くことの出来ないものでありませう。たゞ自分でさういふいふ所を希望してあこがれて居るに過ぎないのであります。眞實の報土といふものはさういふものでなく、佛の本願に隨へばどうしても行かなければならぬところでありませう。

讀誦と念佛

讀誦と念佛

前に天台宗の實際は法華經讀誦と、眞言行と、禪觀修と菩薩戒と念佛との實行であると申しましたが、しかしながら、その念佛は讀誦の一法であるものと考へて居られたやうでありました。法然上人の念佛は決して讀誦の一法に屬するものではなく、何事をも打捨ててただ佛の名を稱へるのであります。元來お經を讀誦するといふことは、これによりて佛の功德を念じ、佛の慈悲を念ずるのであります。その佛といふものは澤山であります。念佛にありては、それが阿彌陀佛とか、釋尊とかに限られて居るのであります。しかしながら、それも讀誦の一法であるとするれば、その念佛は言ふまでもなく觀念の念佛であります。法然上人は斷然として、その念佛がただの口稱にして觀念によるものでないといふことを主張して居られるのであります。心を觀、法を念ずるといふことは固より容易の業ではありません。まして讀誦の一法として念佛するといふことになれば、これを修むることに多大の努力を必要とすることは勿論であります。法然上人の教は本と凡夫が往生するの道を説かれたのでありますから、それが

念佛宗

凡夫の行として實際に行はるべき口稱の念佛によりて、報土に往生することが出来るのであります。まことに凡夫直入の易行道であります。

念佛宗

『愚管鈔』と申す書物に、當時の有様が記載してありますが、それに據ると「建永ノ年、法然房トイフ上人アリキ、マヂカク京中ヲスミカニテ、念佛宗ヲ立テ、專修念佛ト號シテ、唯、阿彌陀佛トバカリ申スベキナリ、ソレナラヌコト、顯密ノツトメハナセゾトイフ事ヲ言出シ、不思議ノ愚癡、無智ノ尼入道ニヨロコバレテ、コノ事タダ繁昌シテ、ツヨクオコリツツ、ソノ内ニ安樂房トテ、泰經入道ガモトニアリケル侍ノ入道シテ、專修ノ行人トテ、又住蓮トツガイテ、六時禮讚ハ善導和尚ノ行ナリトテ、コレヲタテテ尼ドモニ歸依渴仰セララルコト出來ニケリ、ソレラガ、アマリサニ言張リテ、コノ行者ニナリヌレバ、女犯ヲ好ムモ、魚鳥ヲ食モ、阿彌陀佛ハ、スコシモ咎メ玉ハズ、一向專修ニ入リテ、念佛バカリ信ジツレバ、一定最後ニ迎ヘ玉ヒテ云云」と言つてありますが、いかにも佛教といへば、顯密の二教に涉りて、義理の深遠なるものであると教へられ、それによりて成佛

その餘弊

の目的を達せむには嚴肅の修行を要するものであると信じて居つた當時の人々の耳目に、法然上人の念佛宗が異様に感ぜられたことも當然であります。一方には當時、源平の戦がすみて、さしも榮華を窮めた平家の一族が、脆くも西海の藻屑と消えた、世の有爲轉變の有様を、眼のあたりこれを目撃し、浮世の果敢なき相に、その心想が亂れたものが多かつたのでありますから、これ等の人々が、いかに罪惡の深いものでも、ただ佛の名を稱へることによりて報土へ往生することが出来ること聞いて、多くの人々が、この凡夫直入の道へ入つたことは想像するに難くないことでありませう。

その餘弊

しかしながら、法然上人の念佛は、眞實の意味にて、これを理解することが、當時の人々には、困難であつたと見へまして、これを尊奉する人々の間にも甚しくこれを誤傳した人々も多かつたやうであります。従つてその餘弊も少なかつたやうであります。『元亨釋書』と申す書物の中に、そのことに就きて、次のやうな記事が載つて居ります。

『元暦文治の間、源空法師、專念の宗を建つ、遣派末流、或は曲調を資し、抑揚頓挫、流暢哀婉、人の性を感せしめ、人の心を喜ばしむ、士女樂で開き、雜沓駢闐、愚化の一端たるべし、然れども流俗ますます甚しく、動もすれば伎戯を街ふ、云云』(本と漢文)

この記事に據りて見ますと、當時念佛宗の僧侶の中には、一種美妙の調子を以て、念佛禮讚の行をなし、その音聲流暢哀婉にして、抑揚あり、頓挫あり、聞く人をして感歎せしめ、隨喜せしめ、聽衆堂に満ちて雜沓を窮めたことが窺はれるのであります。これも愚昧の人を教化する一法でありませうが、しかしその流俗ますます甚しくなりて、それが伎戯を街ふやうなことがあつたと傳へられて居ります。そこで『元亨釋書』にも

『酒宴の末席に交はり、盃觴の餘瀝を受け、瞽史倡伎と、膝を促して互に唱ふ、云云』(本と漢文)

と見えて居ります。これに據りますと、念佛は宴會の席でも行はれるやうになり、瞽人や藝者の類と膝を交へて、共に酒席に侍りて、その娛樂を助けたものと見えます。まことに念佛宗の盛に行はれたる時の餘弊と申すべきものであります。

す。

住蓮安樂

住蓮と安樂との二僧は法然上人の弟子でありましたが、鹿ヶ谷にて別時念佛の業を始め、盛に念佛宗を宣傳したのであります。そこで多くの人々がそれに歸依して、洛中洛外の老若男女前を争ふて鹿ヶ谷に參詣したのでありますが、後鳥羽上皇の寵姫に鈴蟲、松蟲の局と申すものが、はからずそこに參りあはせて、渴仰の思ひ深く、信心肝に銘じて、忽ち出家して尼となつたのであります。それだけでなくとも、法然上人の念佛は叡山や奈良の僧侶達から攻撃せられて居つたのであります。かかるところへ、後鳥羽上皇の寵姫が上皇のお許を待たずして出家したやうなことが、原因となりまして、念佛宗が興つたために、老少のものが悉く家業を捨てるといふことが表面の制止の條件となりて遂に念佛は停止せらるるに至りました。さうして、住蓮・安樂の二僧は、念佛宗を弘通せむがために諸佛諸教を謗るといふ罪科によりて死刑に處せられたといふことであります。

三 心

すべて、宗教の中に、新しい一派が興るときには、舊宗派との間に衝突があらはれてその犠牲となつて身命を抛つものも少なくないのでありますが、法然上人の念佛宗にも、その始め、多大の法難がありました。それがために法然上人を始め、數人の弟子が流刑に處せられるやうなこともありました。しかしながら、これは要するに、外形のことでありまして、宗派の眞の發展の上から見ればむしろ内心の問題が重要なものであります。内心の問題と申すのは、法然上人の念佛宗の眞實の意味が、十分によく當時の人々に理解せられたものであつたか、どうかといふことであります。法然上人の説かれたところを聴聞しますと、已に前にも申したやうにただの念佛でありました。『念佛には甚深の義といふことなし、ただ念佛申すものは必ず往生するぞと知るべきなり』でありました。それはまことに簡單なことでありましたから、或はその行はいかやうでもただ念佛すれば往生が出来るぞ考へたものもありましたらう、或は又、さういふ簡單のことで果して往生が出来るものであらうかと疑を起したものもありましたら

う。法然上人は、佛法に聖道と淨土との二門を別ち、聖道門に入ることは我々に取りて容易でない、我々はその淨土門に入るべきであるとして、さて、淨土門につきて行すべき様を説いて『往生を願はむ人は至誠心・深心・廻向發願心の三心を具足せねばならぬ』といふことを強く唱道せられたのであります。

至 誠 心

法然上人がこの三心につきての説明は、大略次の通りであります。淨土に往生しやうと思ふものは安心起行と申して、心と行と相應することを要するのであります。その心といふは觀無量壽經に説いてあるところの三種の心であります。すなはち一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心、この三種の心であります。法然上人は善導大師の説に従つて、この三種の心を説明して、至誠心とは眞實の心であると言つて居られるのであります。一切衆生の身・口・意の三業に修するところの解行が必ず眞實の心の中でせられねばならぬと言はれるのであります。身にてなし、口にて言ひ、意にて欲すること、皆眞實の心を具へねばならぬと言はれるのであります。外には賢善精進の相を現じ、内には虚

虚假の人

假をい、だ、く、こ、と、を、得、ざ、れ、内、外、明、闇、を、え、ら、ば、ず、眞、實、を、も、ち、居、よ、と、言、は、れ、る、の、で、
あります。これを要するに、内が空しくして、外をかざる心がありてはならぬ、
必ず内に眞實の心を起して、外に賢善精進の相をあらはすことが肝要であると
説かれるのであります。

虚假の人

法然上人は更に至誠心につきて四種の不同を擧げて説かれました。一には外
相は貴きやうにして、内心は貴からぬ人、二には外相も内心も共に貴からぬ人、
三には外相は貴きやうに見えずして、内心の貴き人、四には内心と外相と共
に貴き人、この四種の不同がある中に、始めの二種の人は至誠心の缺けたる人
で、これを虚假の人と名づける。後の二種の人は至誠心を具へたる人で、これを
眞實の行者と名づけると言つて居られるのであります。それ故に、世を厭ふとい
ふことも、極樂に往生することを願ふことも、人目ばかりを思ふことなく、眞實
の心を起すことが第一であると言はれるのであります。我も人も、果敢なき夢
の世に執着する心が深く、名聞利養に離るることが難く、人目をのみ憚りて、佛

深心

の誓願をたのみて、往生を願ふことをせぬのは全く至誠心が缺けて居るのであ
ります。しかしながら、かやうに申せばとて、ひとへに人目はいかにてよろし
い、人の譏をも顧みぬのが善いといふのではないと、法然上人は説明して、
『詮するところは、たゞ内心にまことの心を起して外相をばよくも、あしくも、
とても、かくてもあるべきかとおぼへ候なり』と言つてをられるのであります。

深心

三心の第二は深心であります。法然上人は善導大師の説に従ひて、深心は深
く信ずる心なりと説明して、それ二種を別ちて居られるのであります。一には
決定して深く我身は煩惱具足せる罪惡生死の凡夫なり、善根薄少にして曠却よ
りこのかた、常に流轉して、出離の縁なしと信すべし。二には深く彼の阿彌陀佛
の四十八願をもて衆生を攝取したまふ、すなはち名號を稱ふるものは彼の願に
乗じて定めて往生することを得ると信じて一念も疑ふことなきが故に深心と名
づくところの善導大師の説明を擧げて、その心は始に我身のほごを信じ、
後には佛の願を信するのであります。我等はいまだ煩惱をも斷せず、罪業を

廻向發願心

もつくる凡夫であるけれども、深く彌陀の本願を信じて念佛すれば、決定して往生することを得るのであると言つて居られるのであります。『ただ心の善惡をも願みず、罪の輕き重きをも沙汰せず、心に往生せむと思ひて口に南無阿彌陀佛と稱へるときは聲につきて決定往生の思をなすべし、その決定心によりてすなはち往生の業は定まるなり』であります。それ故に『深く信ずる心と申すは、南無阿彌陀佛と申せばその佛の誓にて、いかなる身をもきはらず一定迎へ給ふぞと、深くたのみて、いかなるごがをもかへりみず疑ふ心のすこしもなきを申候なり』であります。

廻向發願心

三心の第三は廻向發願心であります。ごういふことであるかと申すに、善導大師の説明に據りますれば、過去及び今生の身・口・意の三業に修するところの世出世の善根、及び他の一切の凡聖の身・口・意の三業に修するところの世出世の善根を隨喜して、この自他修するところの善根を以て、悉く皆、眞實の深心の中に廻向して、彼國に生れむと願するのであります。

起行

先づ我身に於て、前の世及び今生に身にも口にも造りたらむ功德を皆悉く極樂に廻向して往生を願ふのであります。次には我が身の事にも、人の事にも、この世の果報をも祈り、又同じ後の世の事なりとも、極樂ならぬ餘の淨土に廻向することなくして、一向に極樂に往生せむと廻向すべきであります。しかしながら、一切の善を皆、極樂に廻向すべしと申せばとて、念佛一門に歸して一向に念佛を申すものが、ここさらに餘の功德を造り集めてこれを廻向せよといふではありませぬ。

起行

法然上人はかやうに、三心の事を説明して後に、この三心が具足して必ず往生することが出来るので、若しその一心でも缺けた場合には往生することが出来ぬとあるから、往生を願ふ人はこの三心を具足せねばならぬと説いて居られるのであります。それから起行といふのは、この三心を具足して一向に念佛を申すことでもあります。阿彌陀佛の本願にも、釋尊の説教にも、善導大師の解釋にも、諸師の所説にも、極樂に生れるための行には念佛を以て本體とするものであ

る言はれるのであります。かやうにして、法然上人がすすめられるところの念佛は、三心具足の念佛でありました。

三 緣

かやうにして、往生を願ふ人が安心起行によりて、その所願を達することが出来るのは、畢竟、親緣と近緣と増上緣との三つの緣によるものでありまして、若しこの三緣がなかつたならば、往生の目的を達することは出来ないことであらませう。第一の親緣といふのは、早く申せば、佛の心が我々凡夫の心と同じやうになるのであります。そこで、我々が佛の名を稱ふれば佛はそれを聞きたまふ。我々が佛へ禮をすれば佛はそれを見たまふ。又我々が念すれば佛はそれを知りたまふ。かやうに、佛の心と、我々凡夫の心との間に、隔りがなくなるのであります。この親緣によりて三心具足の念佛を稱ふるものは必ず攝取せられると説かれるのであります。第二の近緣といふは、我々衆生の心が佛の心と同じやうになるのみでなく、我々凡夫が、佛を見やうと思へば佛を見ることが出来る、すなはち報佛を見ることが出来るのであります。第三の増上緣といふのは、親

緣によりて我々の心が佛の心と同じやうになり、それによりて念佛が行せられるのであります。又近緣によりて佛のすがたを見ることが出来るのであります。さうすると、それによりて我々の安心起行の力が增長するものであります。それ故にこれを増上緣といふのであります。この三緣によりて三心具足の念佛を申すものは必ず佛に歸命する心を起すものであります。

正 定 業

右に申すやうな次第で『三心具足する故に歸命の心起る、これを南無といひ、三緣そなはれば無碍光の體、我等が罪惡の身に、へだつるところなき功德を阿彌陀佛といふなり、故に南無阿彌陀佛と稱する六字の名號に、一代の佛教の本意も悉くおさまり、十方三世の化佛も、しかしながら皆備はるが故に、念念不捨者、是名正定之業、順彼佛願教といはれて、南無阿彌陀佛の外に又、餘事なきなり』と説かれて居るのであります。まことに三心具足して申すところの念佛は、佛の本願に順するものでありますから、正しく往生が決定するところの業であります。

三心の沙汰

しかるに、法然上人はある場合には三心の沙汰は詮なしと申されて居るのであります。それは『名號を稱ふれば必ず往生するにばかり、まめやかにたのみ、稱ふればその人の心におのづから三心もそなはりて居る』のであるが、それに對して、三心とてことごとくしく申しなせば却て信心をみだることがあると申されるのであります。法然上人は又、ある場合には三心のことをくはしく説いて居られるのであります。それは『もし日來ヒヨクは疑ひの心もありて三心具足せぬ人も、聖教を學すれば道理に折れて三心の起ることもあれば、さやうならむ人のためには三心の様を知らむも大切なるべき』ことでありませう。かういふやうな次第で、法然上人の念佛は、どこまでも三心具足の念佛であります。我を忘れてただ一向に名號を唱ふる場合には、その中に至誠心も、深心も、廻向發願心も、皆そなはつて居るのでありますから、改めて三心を沙汰するには及ばぬと言はれるのであります。

法蓮房

法然上人の念佛はかくの如きものでありましたが、當時それを十分に理解するものが少なく、或は却てそれを誤解するものが多かつたなどで、それが問題となり、遂に念佛停止の令が出で、法然上人は流罪の刑に處せられることになつたのであります。その時、弟子の法蓮房と申すものが、法然上人に申し上げるやう『上人の流罪は一向専修念佛興行の故であると申すことではありますが、上人は老邁の御身でありますから遠方においてならば御命が安全でありますまい、私共は恩顔を拜し御教を受けることが出来ませぬ。又師匠が流刑の罪に臥したまはば残り留まるごころの門弟は面目がありません。その上、勅命でありますから、一向専修念佛の興行を止むべきよしを奏上して、内々御化導なされては如何でございまするか、一座の門弟は多くかういふ考を持つて居ります』と申し上げたごころが、法然上人の申されるには、『流刑は更にうらみとすべからず、その故は、齡すでに八旬にせまりぬ、たごひ師弟同じ都に住すとも、娑婆の離別は近きにあるべし、たごひ山海をへだつとも浄土の再會何ぞ疑はむ、又厭ふと雖も

西阿彌陀佛

存するは人の身なり、惜むと雖も死するは人の命なり、何ぞ必ずしも處によらむや、しかのみならず、念佛の興行、洛陽にして年久し、邊鄙におもむきて田夫野人をすすめむこと、年來の本意なり」と言つて、その言には従はれなかつのであります。

西阿彌陀佛

法然上人は、かやうに弟子の一部の人が、専修念佛の停止を勸告したにも拘らず『源空が興する淨土の法門は、濁世末代の衆生の決定出離の要道なるが故に常隨守の護神祇冥道、定めて無道の障難をこがめたまはむか、命あらむ輩、因果の空しからざることを思ひ合すべし』と言はれ、又『此法の弘通は人はごごめむとすとも、法は更にとごまるべからず、諸佛濟度の誓ひ深く、冥衆護持の約ねんごろなり、しかれば何ぞ世間の機嫌をばかりて、經釋の素意をかくすべきや』と、斷然として、その主張を強くし一人の弟子に向つて、専修念佛の義を述べたまふたのであります。そこで御弟子の西阿彌陀佛と申すものが推參して、『かやうなことはおやめになつた方がよろしいと存じます。専修念佛のこご

念佛往生の現證

をお尋ね申すものがありまして、それに御返事をなされてはなりません」といふやうな意味のことを申し上げたところが、法然上人はそれに對して『汝は經釋の文を見ぬか』と仰せられました。西阿彌陀佛『經釋の文はまことにさうであります、それでは世間の物議を醸しますから』と申し上げたところが、法然上人は斷乎として『我れたごひ死刑に行はることも、この事はすばあるべからず』と申され、至誠の色がその顔にあらはれたので、これを見たものは皆感涙にむせむだといふことであります。

念佛往生の現證

法然上人が専修念佛を信せられることは此の如く堅固で、全體が妥協的人格であつたやうに見えるながら、念佛往生の一義につきては、何人の言ふことにもその志をまげず、たとひ死刑に處せられてもかまはぬといふ意氣でありました。そこで到頭、流罪に行はれて、讃岐へと赴かせたまふ途次、播磨の國、高砂の浦に著かれたときに、多くの人が結縁した中に、七十あまりの老翁と、六十あまりの老女の夫婦が上人に謁して申すやう『私ごもはこの浦のあま人で、幼きご

きより漁を業とし、朝夕にいろくづの命をたちて、世を渡るばかりごととして居りました。ものの命を殺すものは地獄に落ちて苦しまねばなりません。いかがしてこれを免れることが出来ませうか、たすけたまへ』と手を合せて泣いたのであります。法然上人はこれをあはれみたまひて『汝が如くなるものも、南無阿彌陀佛と稱ふれば、佛の悲願に乗じて浄土に往生することが出来る』と懇に教へたまふたので二人ともに涙にむせびて喜んだのであります。さうして、それから後は、晝は浦に出でて、手に漁りすることは止まなかつたが、口には名號をとなへ、夜は家にかへりて二人とも聲をあげて終夜念佛したのであります。それが終に臨終正念にして往生を遂げたといふことを聞きたまひて、法然上人は『機類萬品なれども、念佛すれば往生する現證なり』と申されたといふことのであります。

これに類似した例は、法然上人の傳記の中に、なほ澤山に擧げてありまして、まことに、法然上人の浄土の法門が、それまで聖道として説かれたる佛教の法門とは異なりて、いかなる愚癡のものも、又罪惡深重のものも、ただ念佛の行によりて報土に往生することが出来ることを示されたのであります。

對機說法

粟津義圭といふ人の書かれた書物の中に、釋尊のお弟子の中で一番偉らかつたと言はれてゐる舍利弗尊者のことが書いてありますが、それは次のやうな話であります。舍利弗尊者の弟子に、一人は鍛冶屋を職業とし、一人は洗濯屋をして居る男がいました。そこで舍利弗尊者が洗濯屋の男には數息觀を教へました。數息觀といふのは出入りの息の數を數へて、それでもつて心をしづめる教であります。それから鍛冶屋の男には不淨觀をすすめました。それは人間の身體といふものはまことに穢いものである。この世の中といふものはまことに濁つてゐるものである、さういふことを觀念する、さうすると正しい道理が明かになる、さういふことを教へたのであります。ところが三年経つても五年すぎても兩方とも一向にその効果が現れなかつたのであります。そこで舍利弗尊者が、或る時釋尊に、さういふわけでありませうと問ひました、ところが、釋尊がいはれるのに、『それはお前の教へ方が反對である。鍛冶屋に數息觀を教へ、洗濯屋に不淨觀を教へなくてはいけない。鍛冶屋といふものは平生吹子の息の加減

十人十色

に慣れてゐるから息を數へるといふことは大變に爲し易い、また洗濯屋は元來が汚れ物をきれいにする商賣であるから、不淨觀を修するといふことは大變に樂に出来ることである。それをお前は反對に教へたからその効果が擧らないのである。』といふやうな意味のことを言はれたのであります。そこで、舍利弗尊者はなるほどさうだといふことに氣が附いて、その通りにしたところが、早く成就したといふ話が載せてあるのであります。

十人十色

この洗濯屋と鍛冶屋との話のやうに、人間はすべてさうであります、その人々によつて物の考へ方が違ふことは十人十色であります。若し違つた考へ方のものであれば、幾ら聴いてもそれが自分の心の中に入らないのは當然であります。その考が西の方へむいて居るところへ、東の方のことをいはれても、それは一向に頭に入らないのであります。法然上人が淨土の法門を説かれたときにも『極樂に往生しやうと望むならばただ念佛を申せ』と言はれたのでありますから、それを聞いて極樂に參らむことを望むものは口に南無阿彌陀佛を唱へた

隨類得解

のであります。そこで皆口には同じやうに念佛を唱へ、心には淨土に參らむことを望む、それには變りはありませんけれども、心中の領解といふものは、決して同じことではなかつたのであります。教の趣は一つでありますけれども、これを自分の心に取り入れるといふことが違つたために、法然上人の教も同じ淨土宗の人々のためにいろいろに理解せられたのであります。たとへば成覺房幸西は一念義を立て、長樂寺の隆寛は多念義を主張するといふ風でありました。

隨類得解

佛教の書物の中に、『佛は一音をもつて演説されたけれども、衆生は類に隨て解を得』といふことが書いてあります。釋尊が説かれるところはただ一つの言葉であるけれども、しかしながら、それを聴くものは自分の類に隨ひ、自分の心にこれを聴くのでありますから、自分の心持に相當するやうにこれを受け取るのであります。そこで法然上人が説かれました淨土の法門も、上人が死なれてから後に、その弟子達によつて色々の流儀に分れたのであります。

信と行

信と行

前にも申しましたやうに、法然上人の教はただ念佛して極樂に往生するといふことでありますが、そのことは「選擇本願念佛集」の中にくわしく説かれて居るのであります。その説明は固よりくわしいものであります。これをつづめて申せば、信と行とに歸著するのでありまして、信と申すのは深く佛の本願を信する、罪の深い愚かなものが、佛の本願によつて必ず助かるといふことを信するのであります。さうして、その本願を信するものが往生することを得るのでありますから、本願に従ひて念佛を申さなくてはなりません。それが行であります。法然上人はこの二つのものを強く説かれたのであります。さうして、信を強くいへば邪見に陥る、行を強くいへば自力になるから、そこに深く注意せねばならぬと戒められたのであります。

念佛の説明

念佛の説明

法然上人は當時その專修念佛につきて反對する人が多かつたので、それに對

勸信誠疑

勸信誠疑

して熱心に説明して居られるのであります。それに據りますと、佛の教には聖道門と淨土門とがある。聖道門といふのはこの世界で煩惱を斷つて菩提を得るといふ法門である。淨土の方はこの世界では煩惱を斷つことが出来ないから淨土に生れて煩惱を斷つのである。その聖道門の修行はわれ／＼には出来ないから、そこで淨土に生れて煩惱を斷つべきである。さうしてその淨土門の教といふのは、「觀無量壽經」に説かれてあるやうに、専ら念佛を修めるので、それには三心を具足して念佛を申さなくてはならない。三心といふのは、已に前にくわしく申したやうに、至誠心と、それから深心、それから回向發願心と、この三つの心を具へて居らなければならぬ。心が穢くして、それで念佛を申したところで佛の國に生れる種子にはならない。心を誠にし、また佛の本願を深く信じて申す念佛でなければならぬ。また佛の國に生れようと思つて願はなくしてはならない。その一つが缺けても駄目である。この三心を具足して申す念佛によりて必ず往生することが出来るか、かう説いて居られるのであります。

定善と散善

しかしながら、三心具足といふことも、必しも至誠心と深心と回向發願心とを具足して居らねばならぬと八釜敷言はなくてもよろしい。なせかといふと、専ら心に佛の本願を信じて念佛を申して往生すると少しも疑ひの心が無ければ、それがすなはち至誠心であり、回向發願心であり、三心具足するものであるから、別に三心具足をやかましく言ふ必要はない。しかしながら疑が深くして本願の念佛を信ぜざるものには三心具足といふことを説明をしなければならぬと法然上人は説明して居られるのであります。この三心のこと、法然上人の「選擇本願念佛宗」の中に精細に説いてありますが、その要旨とするところは「本願を信する」といふことを勧め、「本願を疑ふ」といふことを誡められたものであります。

定善と散善

本願を疑ふて信ぜざるものに對しては、しかしながら、十分にこれを説明する必要があるから、法然上人は「觀無量壽經」に説いてあるところの定善と散善とに就て、説明して居られるのであります。定善といふのは息慮凝心と申して

下品下生

心をしづめることとあります。散善は廢惡修善と申して心を淨くすることとあります。至誠心、深心、廻向發願心の三心を具足するといふことも實際問題となれば、息慮凝心と廢惡修善といふことに歸著するのであります。人間といふものは、その心が常に散亂して取りとめのないものであるから、その散亂の心を堅く留めてしまひ、さうして悪いことをやめて善いことをするやうに心がけねばなりません。ただ佛の名を唱へたところがそれで淨土に往生することが出来るものではありませぬから、そこでただの念佛と申しても、三心具足の念佛でなければならぬと説かれたのであります。

下品下生

ところが法然上人が言はれるやうに『定善の門に入らんとすれば、則ち意馬あれて六塵の境に馳する』のが我々の心の常であります。六塵といふのは我々人間の耳、目、口、鼻、意、身のはたらきによりて認識するところの境地のこととあります。我々の心といふものは境によつて移るのであります。周圍の境遇によつていろ／＼に心は動くものでありますから、さういふ動く心をしづめるこ

白木の念佛

ごが困難であります。『かの散善の門に臨まんとすれば、又心猿遊んで十惡の枝に移る。かれをしづめんとすれども得ず。これを止めんとすれども能はず』悪いことを止めることも我々の心では容易でありませぬ。定善と散善とをつとめなければならぬのであるが、自分といふものを見れば、その兩方がだめであると歎かざるを得ぬのであります。ところが「觀無量壽經」に説かれてゐるところを見ると、下品下生のものが、淨土に生れる因といふものは、十惡五逆の衆生が臨終に善知識に値ひて一聲十聲、南無阿彌陀佛の名號を唱へて往生すると説かれてあります。法然上人はこれが自分の心に相當する教であるとして專修念佛の義を立てられたのであります。

白木の念佛

かやうな意味で、法然上人の教といふものは、自分の力を見かぎりして、ただ阿彌陀佛の名を唱へて往生することを信じて疑はぬといふので、その念佛はただの念佛であります。何等の助けをささぬのであります。他力にお任せするばかりであります。法然上人の弟子で、鎮西派の開山であるところの聖光上人が

世間超越

書かれたものを見ると、『善導の御心は淨土へ參らんと思はん人は必ず三心具足して念佛を申すべし、念佛は決定往生の行なりと信すれば自然に三心は具足』と書いてあります。又西山派の證空上人の書かれたものを見ると『念佛を色ごらず、中々に心を添へず、申せば生ると信じて南無阿彌陀佛と稱ふるのが本願の念佛』であると言つて、それに『白木の念佛』といふ名をつけて居られるのであります。

世間超越

かういふ風にして考へてゐると、前に申した聖道の教は、すなはち、この世界で煩惱を斷つて佛に成らうとするものでありますから、それはいふまでもなく、世間を超越しなければ出來ぬことであります。それ故にこの教では我々は出家して、日常の生活を離れなければ駄目であります。つまり、聖道の教は、人間の世界を離れて世を救つて行かうといふ理想であります。

教團の成立

教團の成立

此の如き理想を主として、この世界で煩惱を断つためには、日常の生活を離れることが第一であります。そこで、山の中に入るかごうかして、浮世の生活を離れ、修行して佛にならうとするのでありますから、同じ志の人々が集つてお互に勉強をしなければ、その目的を達することが出来る筈がありません。さうすると、その人々の集つてゐるところには、それを指導するものがなければなりません。そこで教團といふものが出来るのであります。その教團の人々は人間の生活を離れて兎も角も佛に成るべき修行をするための専門家であります。その教團に居ない人はそれが出来ないからそれは全く取り残されてしまつて、往生するのは世間を超越して嚴肅の修行をする人だけに止まるのであります。

大乘佛教

しかしながら、此の如きは大乘佛教の精神ではありません。大乘佛教は一切の衆生が佛に成る道を説くのであります。世間に居つて世間のすべての人と一緒に佛になることを期するのであります。法然上人の教として説かれたものは

それでありませぬ。世間を超越して、自分のみが佛になればよいといふのではありませぬ。世間に生活して、世間の人々と一緒に佛に成らうとするのであります。すから、師匠もあるわけではなく、弟子もあるわけでありませぬ。ただ佛の本願を信すればよいのであります。世間を超越してさうして佛にならうとすればこそ嚴肅の修行が必要であります。修行することの出来ない自分を投げ出して、ただ本願を信することによりて往生しようと思ふのであります。特別な教團はなくともよいのであります。ただ同行のものが集合して共に手を携へて淨土に往生することを期することでありませぬ。その教團は前の教團とはまるでその意味の異つたものでありませぬ。世間の多くの人と離れては居ないのであります。それ故にこの意味の教團の力といふものはまことに重大なものであります。その教團が世の中に出て来て多くの人々が、それに動かされて佛の本願を信することが出来るのであります。かやうにして、法然上人の吉水の教團は段々と盛になりまして、多くの人々が教團に動かされて本願の念佛の教に入つたのであります。

親鸞聖人

吉水の教團に動かされて本願の念佛の教に入つた人々の中で、私が特にあげて、ここにお話をしようとするのは親鸞聖人であります。親鸞聖人は吉水の教團に動かされて、本願の念佛の教に入れられた随一の人であります。法然上人を中心とする吉水の教團が出来たのはその晩年、六十六歳の時であつたといふことではありますが、親鸞聖人が法然上人に就て教を受けられたのは廿九歳の時であつたと傳へられて居ります。親鸞聖人の『教行信證』と申す書物の中には『建仁辛酉の曆、雜行を棄て本願に歸す』と書いてありますから、建仁元年、年廿九歳の時であつたと思はれます。親鸞聖人は早くから出家せられたのでありますから、それまでは何かほかのことをして居られたのでありませう。廿九歳の時、法然上人の浄土の教を聞かれて、さうして本願といふものが實に頼もしいものだと知られたとき、自分の力といふものはみな棄てられたのであります。それから後、深く本願を信じて、阿彌陀佛の教の本旨を明かにせられたのであります。

貴重の教

釋尊以來、種々の教が説かれて居ります。これは固より皆、貴重の教であります。しかしながら、その教はいかに貴重でも宗教とならなければ駄目であります。教は教としてそれを知ること、出来る、考へることも出来、覺へて居ることも出来、人に向つてこれを話することも出来ますけれども、しかしながら肝腎の自分の魂が、それによつて導かれて行くといふことは出来ませぬ。まさかの時にその教が自分を導いてくれなければ、その教は何等役に立つものではありません。しからばその教が自分のものになるといふことはまことに重要であります。それはどうすれば善いかと申せば、それにつきて自分といふもの、相をばつきりと見なければならぬことを第一に言はねばなりません。たとへて申せば、向ふの方に景色の善いところがあつて、その景色の善い所に上つて居る人が、景色が善いから此所に來いと呼ぶとする。それは教であります。その言葉を聞いて景色の善い所に行かうとするのは、その教に従ふのであります。その教に従ふことは善いとして、しかし、問題はその言葉の通りに私がやられるか

自分の相

うかといふことであります。此所は景色が善いから来いといはれても、自分が行かれなければ駄目ではありますが、自分が果してその言葉の通ほりに行くことが出来るかを考へて見ねばなりません。

自分の相

そこで自分の相をばつきりと見ることが必要であります。その自分を棚に上げて置いて、ただ徒らに希望のみを先に立てて、つとめても、その希望は到底達せられるものではありません。さういふ次第でありますから、教はいかに貴くても、それがそのまま直ちに銘々の宗教になることは決してないのであります。その教が自分の宗教となるのは必ず自分の相をばつきり見た時でなければなりません。自分の相をばつきり見ると、さうすると我々のやうな力の足りないものは、自分の力では如何ともすることが出来ない。自分のやうに智慧の浅いものはどう考へてもその考によりては萬事を解決することが出来ぬといふことがわかるのであります。

内省と努力

内省と努力

釋尊の説かれたやうに道を修めて、涅槃の悟を開くといふことは固より貴い教であります。ただその教に従ふて道を修めるといふことに努力することは、その教を自分のものとする道ではありませぬ。なるほど、釋尊が道を修めて、涅槃の悟を開けと言はれることに従つて、道を修めて悟を開くといふことには間違のないことは明かでありますが、しかし、いかに努力してもそれが自分のものにならないければ何の役にも立ちませぬ。そこで重要なことは内省であります。内省を深くして見ると、釋尊の説かれた教が私自身のものになつたのは釋尊の説かれたことが、とても自分には實行することが出来ぬといふことでありかやうにいます。内省が深くなりて、自分の相が自分によく知られたときに始めてここに眞實の宗教の心のはたらきがあらはれるのであります。

浄土の法門

浄土の法門

法然上人は、此の如くに、内省を深くして、自分の力にては到底及ばぬことを

實行の方面

知りて、學問を捨ててただ念佛することによりて往生すべきであると説かれたことは已に前に説明した通りであります。全く自分の相をはつきり見ての後にそれを見限つてのことです。佛の本願に従ふて念佛することによりて淨土に往生するより外には別の法はないとせられるのであります。さうして法然上人はこれを淨土の法門と言つて居られるのであります。

實行の方面

しからは淨土教にありて、實行の方面はどうすればよいかと申すと、それは佛の名を稱へる外はないと法然上人は説かれたのであります。佛の本願を深く信じて後に専心に佛の名を稱へることが起行であると申されるのであります。その稱名は三心具足でなければならぬのであります。念佛はただのものであります。その心は至誠でなくてはならぬのであります。それも深く本願を信じて一心不亂に念佛を申すならば、それがすなはち至誠の心でありますから別々自分の心を至誠にすることをつとむるには及ばぬと言はれるのであります。此の如き意味によりて法然上人の教は『往生の業は念佛を本と爲す』と言はれる

信心爲本

のであります。

信心爲本

そこで法然上人の弟子の中には、『念佛すること』に重きを置き、念佛は一遍では駄目である澤山に念佛を申さねばならぬといふやうな考を起す人もありました。自分の相を内省することなしに、念佛が往生の業であると聞き取つたためでありませう。親鸞聖人も法然上人に就て、念佛爲本の教を聞かれたのであります。親鸞聖人は自分を内省することが徹底して居つたやうでありますから、『念佛すること』に對して『念佛する心』の如何が重要であることに氣がついたのであります。そこで、『念佛を本と爲す』の教が『信心を本と爲す』と受け取られたのであります。『念佛すること』は我々の心の活動で、外方に向つてはたらくのであります。『信すること』は自分の心の上にはあらはれるところの現實の状態であります。親鸞聖人はこの状態を見て、そこに本願の貴きことを感知せられたのであります。親鸞聖人の考へられるところでは、我々が念佛する心の状態は、我々が自分の力を見限つたときにあらはさるものであり

彌陀教

まして、それは佛の心が我々をして念佛せしめるのであると感ぜられるのであります。信ずるといふことも佛の心が我々をしてさうあらしめられるのであります。これは自分の心としては何等價値のないものであると知られたとき、あれはらる心持であります。

彌陀教

それ故に『信心を本と爲す』といふことは、一方にありては自分の心を全く捨てることであり、一方にありては佛の本願を疑はぬことではありますが、さうした心持になりて、そこにあらはれるところのものは、それが佛の光明に照らされたといふ感情であります。不思議の力に動かされたのであるといふ感情であります。いかにも不思議で、しかもそれは全く自分の心でないものであると知られたときに、それが他力であると言はねばならぬのであります。さうして、その他力が全く阿彌陀佛の本願に外ならぬものであると感知したとみに、ただその本願に信順して念佛するの他には何事もなすべきものはないのであります。これを彌陀教と申すのであります。

昭和七年二月一日印刷
昭和七年二月三日發行

(定價金八十錢)
郵税金 四錢

發行者兼編輯者 中山文化研究所
右代表者 秋山不二
印刷者 東京市小石川區高田豊川町六番地 長宗泰造
印刷所 東京市小石川區高田豊川町六番地 厚徳社

發行所 東京市麴町區内山下町一丁目一番地 東洋ビルヂング四階
中山文化研究所

372
520

終

